

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

JAPAN

和装本

ヶ 5

44

162

要馬役極集

三





六

要馬秘極集卷之五

大馬ハ擬教了隨て甚西捨退ちテ一李教より  
却て深癖增長すテ 何れ通う思ひ甚深  
してモ近か勘考もて玉遠甚之手もめや也等  
のとひ紅を西馬久保あす 懸畏胸中 みづもは  
幻事よらしの御掌乱世にて源曲を明るひま  
き心もとうちつゝ又うのよふは怪我を事  
多々の體氣とつりうなづく、不思ひをさ  
てそと云病氣もせぬうもせすあ不申道と  
そそゆ馬連心留ミテ 服不とすれど掌  
よあ半そぞのつり不ふに併身の心服てるに非  
手くからぬかア 馬心通不及ま一天乃時後  
勘定にあつては臥乃ち不とぞとせうちがりも  
れちて馬がうれき公と詠み下りを候

一物にてひざこにはあくう妻とふくをう  
ひきのいそぐるもたての轍割のあくとうす  
ほほ延うるよむのうるるせんや唇邊に  
以轍延して弱を脅削もくあく曲玉はが属  
延うるうるもく又馬を猶延ふうう一車  
弱はみはもくとあてくのとてほてあそひえ  
後うてを轍よくとての序もくへりも延弱  
色轍門をとめてめうらひ馬乃句にうく  
進返くもにお車すくまかね要や徑を轍を  
轍すよ轍縫と金て新あくわあくわくは  
とむに五五五一禪馬すとを被強引まくと  
ちくとぞくとぞくもくや裸るハ行方少もくくふ  
不思くくくくうらうくゆくとくのくくちの轍  
成ア左のふくをんせきふくまくもんもん

も則るるの轍割もくとくありうあま  
ふくもくま一キカのやに倍

車乃曲勘のう能に可曲ううとくとくもく申  
よ根めうく一モ油曲とくとくせくしてね轍  
も根付よ依てモ油とくとく一又く乃解多く  
くの轍延を壁引くある乃解多く解  
渾とくとくからくとく曲多くとくとく陰陽のこふ  
うく一うくとく行かあきこくのく曲とはうく云  
かやる進端屋う依てふく乃解多くそれ  
は面とほりうるんとくとく依てうく成相  
とすふりや

強弱乃車乃馬のうれ脇かあく利害  
もく一もく強弱は既てあく快廣也く  
強弱延うるは弱を脅よそくめをひかく

お子のうへる  
押持よちるゆゑ、  
乃馬は名相手は櫻年もせば後  
足と右脚筋はぬけてからと多くは  
魚正が、かみて、ひはとひて、ゆと  
らかと、うそくを、通す中もくら  
もとくあむわざと、おもむきよく  
き事肝筋也  
おのれ事馬に似て、ひ弱ちれり、  
ゆふるるもんまくして、口もくは  
はもありおどんを、あわ能は、耳根と山  
はすもくわくわく、けびじく、ひれい、  
おもめとく、肝筋、取筋、直し、ねぐ  
うて、ひ原ひゆと、りうちのうなと、たびに

とて口のまゝ放すもから羽口あれどもあ  
はくもよもじり馬乃にまほにまほ達也弱よ高  
羽も降るをかへ事に撫車するがふはま  
て内みの正義を以て擬を正す能を失ひそ  
そとともも馬ハ久清あくをせ  
そとて正義を正す能を失ひそ  
ゆきを生じて取被丸坐して後肝  
もえとすむ印つるまくらのめのめにまく相  
立候あひ遠のくと初「之」の末めう  
く自立へととめとけびとまくふ  
ゑむれあめぬもりとくに延れらへ（或  
有もくさきとくの馬をばすまくあり  
ておまちひこまくれり是へて鷹下め

以降成て一とくふるよりりとくはとくと  
御事よりおもてをすがるはるかにと  
か  
馬乃事能をひよれもとほとあひて用と  
御事の水筋今明かてうるしゆひを晴  
波をすくへぬ下手とめくらをぬれ  
てうるしゆかくひとよせゆめりあはる  
鞍馬始て場所と付車至下まよ下  
ともうまうつともうけ鶴飛て工事あひて  
ゆくむじゆゆきとわくにあ  
とく事せとてんおとくにあ  
けよ御をとくにけよ御をとくの馬乃口  
力とて引えとくにとくとて毛根よぬちと  
事場のありふ時鉢下毛根とてのうり全せとくも  
毛根とてのうり全せとくも

生の如く死の如く各處に留めらるゝは御  
事の如きか。或は此の如きの如きを  
もあつてはゆきぬ。せりばりと  
生と死と馬と出でと相待して  
水車アリ。川をもぐらひ  
ひまかくとて馬場へあり。川をも  
とて走るよリ。セリ。川をもぐらひ  
ひまかくとて馬場へあり。川をも  
とて走るよリ。セリ。五石寺  
馬場アリ。こまは木文門。傍生アリ。  
うもあリ。尾荷アリ。日生アリ。  
てぬうち縄くさ理と云け。又鉢力の角事  
達元角長連玉の如き。ほひ京に移用す



うよ うふひ年裡とあつてよ 駒トヨウ  
ナ切乃あれくよナヘ内にあれくよヌミモハス  
ミケル うち候内肉外とははくに  
アキヤ馬面を切乃コトは中トモ  
道駒川の傷モヒカスレトシモカモムカモ  
ナリシカサガスア思ひあせバカニモアモ  
駒純毛傷モト全柔傷叶 してモカモム  
カモツモホクモカモツモトモカモム  
モア 駒純毛傷乃しきめを益々するゆ  
伊豆のやを廻月立みてモのゆうと摩屋  
モアリカシル 切乃すモテテモアリのや  
カモカモアスリハツシソニヤモニニ柔葉  
モア 修毛毛羽モ乃も初か乃人あて石器  
の事モカモカモカモツモトモツモツモツモ

まもー は  
をちくをもとよせ事駒モカモツモモア  
け印スルメモカモカモカモカモカモ  
テフセセトメ傷ナモアモアモアモ  
トナモアモアモアモアモアモ  
カモ傷駒モ是モカモカモカモ  
カモカモカモカモカモカモカモ  
カモカモカモカモカモカモカモ  
カモカモカモカモカモカモカモ  
カモカモカモカモカモカモカモ

近てきのうづかるふる乃後は妙峰山  
もよよふ馬乃事ゆきまよひの  
ひきしてとおもてこゝにまよひの  
よほりもぬまよひの  
ぬまよひのとくのゆかく山行て宴あ  
弓効ぬくあるもすかす有馬のをも  
てつらよけりてひきよひたれ  
あらわるわくとれとくよア聖丈  
なみゆふあそびゆきの竹ぐもくと  
アあらわるもすかす有馬のゆきを不  
いきりゆきゆきのよさとゆ  
りてちゆき  
は歌ゆくやまゆかひゆきよしてりゆく  
アモ機用もくもくのくわ

唐すすまひ乃る。かくよきよ出のしに、其處水  
或ひ煙つ丹とよみかとてあかねもあらそひを  
とあちうゆめくはな車ひまとおらそひと  
うてえひ度車とてひむじくへはくは  
馬は絶とく。ぬき男丹が身をひらねりあり  
ひぬ  
既とくらふる馬乃事りまくわくも  
あくとくらふるよくとくらひとくらひとくら  
やくもゆくやくもゆくやくもゆく  
やくもゆくやくもゆくやくもゆく  
方鉢とくらひてくらひてくらひてくら  
經とくらひてくらひてくらひてくら  
鉢とくらひてくらひてくらひてくら

致あまふかくアキラムも因みのうぢや也  
とひきうちてその事トアリ且てあるもア  
チヨセテ事事也アリて疾風乃のよまたれ極  
シヤセモソニテ何て是ゆニシテ人をもとを  
して不直ゆ相ク今ノ事アリてわがそ詔書  
を爲す時アリヤル也  
ウリ切落トモソニテ強弱口面筋曲波之經を乞  
て切連玉糸アリて布の上ナ切内引シテアリ  
シテシテシテシテシテシテシテシテシテシテ  
は事ミシテシテシテシテシテシテシテシテシテ  
シテシテシテシテシテシテシテシテシテシテシテ  
シテシテシテシテシテシテシテシテシテシテシテ  
シテシテシテシテシテシテシテシテシテシテシテ

纏身をもてぬよと申すに即ち是田道はまく  
ふはひくまくゆてまくはあれどもやぢゑん  
保あつひゆひあくめ見だらうくはり  
えりにりしゆひ御うそそ鶴掌にゆひあは  
則えきくゆあまくうそくはりかくのそんト  
のの経路に陞て帆とあくらはくにみくも  
きゆほじいゆ乃帆徑とひくらゆゆ紅船  
うそ石舟と風上よ里下今まくひく  
あくゆゆ帆をうちゆくとくらゆく  
も舟をうちゆくとくらゆく  
ひゆとくらゆく車軸はあくらゆく  
走はる車軸は走はる車軸は走はる車軸は  
往はれぬとあくらゆく  
走はる車軸は走はる車軸は走はる車軸は

を下すので力が弱くなることをうそり  
見てゐる。いはゆる「おのづか」  
はよきにまつて信危といいと承り、此をゆき  
はるかにあらわす。まことに、此のうそり  
は、彼の心事の強さとあらゆるあ  
里の心事とあらゆるあらゆるあ  
経験よからぬもよからぬを、  
是れ今こそしてこそ、其の本筋  
で、其のうそりの事と併せ、其のうそりの事と  
引くふれんれんは、方ち今やめ  
搬すせば、よりひき取らるる所、「解説」  
は、其の全文を「解説」連化縫と以て、  
其の解説

はとようりをへるがちも日本でモロコシの  
筋乃革萬葉に身着けとめりて居あつてモロコシ  
及しも後留鋤を力とぞすれぬかとて三鋤舟  
とのひよのりてゆつての若よよめうると  
じゆうをもりあつて挺多日之一も後ちは本  
乃くもくもくもくもくもくもくもくもくもく  
也教舟ゆりて供度すねわて化里ゆきも事方  
<sup>モ</sup>無船乃風とあゆきても後もアヤセ花舟成  
用も後赤のとく船もあらもくもくもくもく  
舟と角舟ひふとく

ホトカヘ軍船めに達ラシム俄ヨリ起テ或  
チトカタニシテアリハシム馬つもニコニコシト  
シテカクシヒミルシテシテシテシテシテシテ  
シテシテシテシテシテシテシテシテシテシテ

シムアシカシムアシムアシムアシムアシ  
キヨ依て原辭とぞアシテ鍔達とほよくシテ  
シテシテシテシテシテシテシテシテシテシテ  
シテシテシテシテシテシテシテシテシテシテ  
シテシテシテシテシテシテシテシテシテシテ

シムアシカシムアシムアシムアシムアシ  
キヨ依て原辭とぞアシテ鍔達とほよくシテ  
シテシテシテシテシテシテシテシテシテシテ  
シテシテシテシテシテシテシテシテシテシテ  
シテシテシテシテシテシテシテシテシテシテ  
シテシテシテシテシテシテシテシテシテシテ

乞候事

馬乃子を以て馬をもとへ  
りと後傳をもとへ候事  
あ鉢をもとへる事とほくあう鉢では  
りもくもくと能役が安らぐと或強き事  
をもくもくと西海と申めてとある事とおも  
口かく

川牛の毛多み川牛には良馬とあつて  
つよま可と云て頭面は鹿の神なり  
て象と一齊にとて水鹿と象がりてあつて  
月とて象と一齊にとて象がりてあつて  
弓もたれりかばあと兩角して象と一齊に  
一齊に馬あはれと馬ノトモをとつて  
はすあはれと馬ノマウジヒ用をあつて席上

さもアソの牛をもとへて喫ひとひともあ  
てもく神せらうりて後川牛と其筋  
搬キテ是れもももりておと多々ももせ年  
れよとよく立ぬせらる。四輪笠りあひてふさ  
は折ちのふくりて、のぶの腰の舟舟用てわち  
つや外内に廻らる。萬葉も民うり  
経馬もりと方るんよモ稀よほて歎ひ  
をひく歎りすと云ふ事とすとす年  
馬工乃ちとくいわ中より空てひくれ廉  
トトもうちの信をのぬうあさまの年事  
トカウリ別うる馬とおて玉ノ解をよは年  
年トテうる岸坂ととめりとと田名乃年を  
而よほひゑく御奉あく一ヶ所  
ひはねすとて後肝をもとへとくすと

手取る事無く此の如きは  
あらゆる事あつてあり猶御多忙を後  
乃ち肝膽もよかへぬほどありのふる事  
也無事にそぞろと静かに坐り乃ちまづ  
主と存思もあつてゐるが爲めもかくも  
付もどりとすらあるが故に年肝もと成  
る事多しとては能ひやうにせらるる處  
も多しとては能ひやうにせらるる處  
て、こそ逆に之をあらわす事多しとては  
之を解る形相とすが如きの事多しとては  
之を解る形相とすが如きの事多しとては  
之を解る形相とすが如きの事多しとては

まへて與あひりを出せうとあはれむほよ  
てゆ休むよとちはやかまく 双所早通ひち  
とまけてしまひのうとまく ロ程力用る  
わゆてハ嘆通むよ やすえうめくがてち  
をてりつめのうとまく あくじらとお  
あよ事うもととまく こせすみ  
あらまきとまく あくもととお  
相望けまくとまく あくせくとお  
ふわりまくとまく あくせくとお  
きよのまくとまく あくせくとお  
してまくとまく あくせくとお  
鶴脣寄あひるすれまく あくせくとお

すまへてもうなつては序のてかどもやう  
たゞきあみ馬かまくらのわくよこせたてを  
ゆるふいぬをあくわく力ふくけにひく  
ゆゑのとくふくねく銅のひびくであくに  
きくそくわくねく

乃へてあつたるをあわせまつりしもむらえ  
はまくらめのとくあくとくめのとくめのとく  
てふとくめのとく

三ノ乃ひかわよひひゆりまくはトロア  
てひまか響ひそひうけりひゆきせ乃  
馬乃被ひ乃とひめアホニルヒトム  
寧ムとけアムアセカヒマムヒムシカ  
と教ムナラムヒタモヒリヒトヒル  
能ハヤミヒトヒムシヒトヒルヒル  
丁ナヒキムシヒトヒムシヒトヒルヒル  
アムのアムアムアムアムアムアム  
ヤミカヌムアムアムアムアムアム  
内ヌカヌムアムアムアムアムアム  
ノウヌカヌムアムアムアムアムアム

やく機事一例の如きはまことに取扱  
つまどはほよそあつみをかて筋もくめみて  
あほくのりや筋もくあてうすくもむよりき  
えのくのりもあつみゆあて山ゆるのみおな  
めとく

ちへこの事とくとの三折子とひ腰して腰と  
ちくちくふももものうり腰に三折子とうふ  
立ち仕掛之次第

手

脇用乃事そと腰に甚速よ機事にてゑり  
あへと用ひ乍りて則事とくとく因ふる成  
程

并扇の事そとほろ引腰座ししんや百四一時  
用ひて則事とくとくあとひひて機事とくとく

一時

三輪経乃事そとひ腰すまがよそく一襲乃の用  
則事ひのひの腰曲退降とく一時

腰曲のよそとくとくひ腰曲退降とくとくてけ外  
ひそみ用ひ

ひ方鍔ひまわらひ腰下直孔とくとくひまわら  
けひ外ひひ腰曲

忘カ乃キツヒひ腰曲退降とくとくひまわら  
ひ腰曲退降とく

速化乃事そとひ腰すまがよそく一襲乃の用  
力の半の半の半腰曲退降とくとくひ腰曲  
直孔ひ腰曲退降とくとくひ腰曲退降とく  
用ひ

能力の半の半腰曲退降とくとくひ腰曲退降とく  
ひ腰曲退降とく

能教乃事モモシモ解説延モルナキ如事トリモ  
紅氣経退モルナシモカクテ用事は  
法師ノヨモモシモ法事立退シテ後院モリ一用事  
留鶴経弱シニ年後モリトシモ御ゆら色モロシ  
依てヨモモシモリモナシモ御ゆら色モロシ  
肝モモモアサセナシモ後シテ後院モアシン  
アシモ先モシテアシモシテ上三事ナハアモ  
レヒと擬用モシヌモナハシモと角微言傳の秘  
教也

要馬秘極集卷之五

直方鬼之卷

要馬秘極集卷之六  
直方鬼之卷

本多氏の下よりのまかせを行ふよもじに  
ももりくもんひあきのうつみもんじきらうもん  
にうづく内よしもんじく屬氣をくもんの内もく  
きくもくとて後モモとあくじくじくうと見  
やゆほこもくはばく縁ゆてあくじく  
は一時左手替左能傳モリ一右不詳にて  
ヨムクとれあくじくノ傳  
御とちくすれ馬桂三派の氣とく氣傳にて  
口氣の形氣ともくらひ取扱ひてモモ氣は直方  
の御氣と氣傳の御氣モリあきらかと傳氣  
ヨムクの御氣りくちきはめとけくろす何と  
其處にて考えよう親中うち取と氣傳す

まやと事のあつひとせう  
うとゆつをきてせせとくに至るまし  
三りよへてほの教と申白主水に一  
うてたりあくすみにすむちと  
をも申通ひてこもといを通事と称す  
てもふ多めの次第行ゆる事は力と申す  
事は事と申すと申すと申すと申す  
黒印と印と申すと申すと  
きしらかひと申すと申すと申すと  
りを傳教用てるを達すと申すと申す  
ノ口傳

ゆんと申すと申すと申すと申すと申すと  
ゆすと申すと申すと申すと申すと申すと  
ゆすと申すと申すと申すと申すと申すと  
ゆすと申すと申すと申すと申すと申すと

内にひきこむ。左衛門はもとより御子馬  
乃は近づく。左衛門の庭内より三年とうらみ  
とくづりる。それから。みゆづりかへて其の曲に通  
し。御者不肢筋もとよす事あらず。腰用と云ふ  
り。アカムシ。めうちも。あうすと。ゆゑて。アカハラ車より  
絶縁。まことに。や帰き。まじめ。かね。此  
ぞ。知ら。まことの。を。アカハラ。車。まじめ。かね。此  
り。アカハラ。も。アカハラ。絶縁。かく。まじめ。アカハラ。車。  
三弓弓の。す。終。事と。帰。よ。アカハラ。車。まじめ。かね。  
之。ゆふ。アカハラ。三。御舟。或。日。壁。内。と。車。を。經。已。を  
内。ゆふ。アカハラ。終。事。と。帰。よ。アカハラ。車。まじめ。かね。  
て。三年。と。も。アカハラ。車。まじめ。かね。  
の。アカハラ。車。と。も。アカハラ。車。まじめ。かね。  
アカハラ。車。と。も。アカハラ。車。まじめ。かね。





ふに依てかき叶ひは



の尼姑れ逃帰に日本へ日本へおもろいよ  
りあけあぬのゆゑゆゑてもまよふ  
アモミシテ伊比年勤のちまこととてりすす  
れすむちまよけはまよせよまよせよ  
れすむ用脚のまよせよまよせよ  
きめりまよせよと用脚をくわへ筋筋のる  
筋筋を身とまよせよの筋筋を身とまよせ  
よせよ

左のよ邊に抜け出たと見て此處を主件  
はあぬ邊に主と見て此處を主経て左邊  
に掛き主をもつてゐる  
せらうし邊の主の基底をあらわすと  
力くしてある事もあらむと見ゆる  
ちのりあきぬりててからにうりて  
とぬりあきぬりてせらひらうと年保つて  
つまうるにけり能力の馬鹿とあらもあら  
アリアリル  
れよ傍くものうけ続のと  
りとあらむ  
かく経のるをもととほよてをとくへか  
くへじうる依くあれと能くはれ  
そうちもあけとめみ縁をとるへる  
前回のやうにうておもてよしのとあらむ

（中略）  
の後と主とあらうと主の後と  
いふことをいはねてり後とあらうと  
全一組とてとてとてとてとてとてとてとて  
うちも腰帶とてとてとてとてとてとてとてとて  
えらうとあらうと腰帶とてとてとてとてとて  
たの腰ととせとてとてとてとてとてとてとて  
やと腰とてとてとてとてとてとてとてとて  
うちと腰とてとてとてとてとてとてとてとて  
腰とてとてとてとてとてとてとてとてとて  
腰とてとてとてとてとてとてとてとてとて  
腰とてとてとてとてとてとてとてとてとて  
腰とてとてとてとてとてとてとてとてとて

まくはりてあをきゆめを多く  
うてふかへにけりと  
うそくのせんゆれりか  
かとめきて振あまつた  
ひときわお徳ゆけ通車上りゆき  
まくはりてあをきゆめを多く  
うてふかへにけりと  
うそくのせんゆれりか  
かとめきて振あまつた  
ひときわお徳ゆけ通車上りゆき









うとひかうて行進せりとひうすまのうじ  
はうまをとてゆきます往來のまゆいれやでこゑ  
ゆがて見ゆふをとてせんとあ連氣をかよひ  
て或限よけむとれんせあらうとくうす  
かれ茶とあらすあて被毛をひくに  
毛の色面ア良ひ肉もひきあはせてあのうひと  
ももをひかはるを國のうみをもせ候よとたる  
名



ひ遠くとぞ下へ御前より鳥取を出  
りとてみちにからひひとに見ゆて附  
りてまつもとをうながすとおもて川と打つて水をや  
り出へ浦口よりて車をきて汎山よりて西へり  
くもとよどきは時と日暮れとともとけり  
七日五日かまくらの事よりあわせの  
寝てわくわくあ年のねうらと大もじあらはせり  
うとあまと能のとをうらと鶴びりとくめえ  
汗身中ふもとをそよびるはあわせたれ  
ぬ身のうもんは通ててあひ乱れりとくめえ  
ゆせてお通よもととくじをきりあひとくめえ  
ゆあひとくめえりゆくめえりおとくめえ  
ゆくめえりゆくめえりゆくめえりゆくめえ  
ゆくめえりゆくめえりゆくめえりゆくめえ

其の脇の傍とて、もくもくと氣を吐き、而と縄と  
とめくちをして、氣を宣津せしもと縄とて、あく  
あく氣を運せしもと縄とて、氣を注はしむる  
けり。自らとて、絶妙なるもの教化ゆゑく勤考  
せり。

首とおもととを注力とせしもと縄とて、氣を吐き、  
ひ後田玉えて、後門と用之ば。  
白前とすそとらぬとお乳達と用之ば  
ちく門のゆきとお乳達と用之ば、後達と用之ば  
かく門のゆきとお乳達と用之ば、前達と用之ば  
角差のゆきとお乳達と用之ば、後達と用之ば  
角長ねぐらと前達と用之ば  
色あん事と前達と用之ば

速玉れて、肝弱の馬と鷹下痛をして、猪突とす  
しと猪

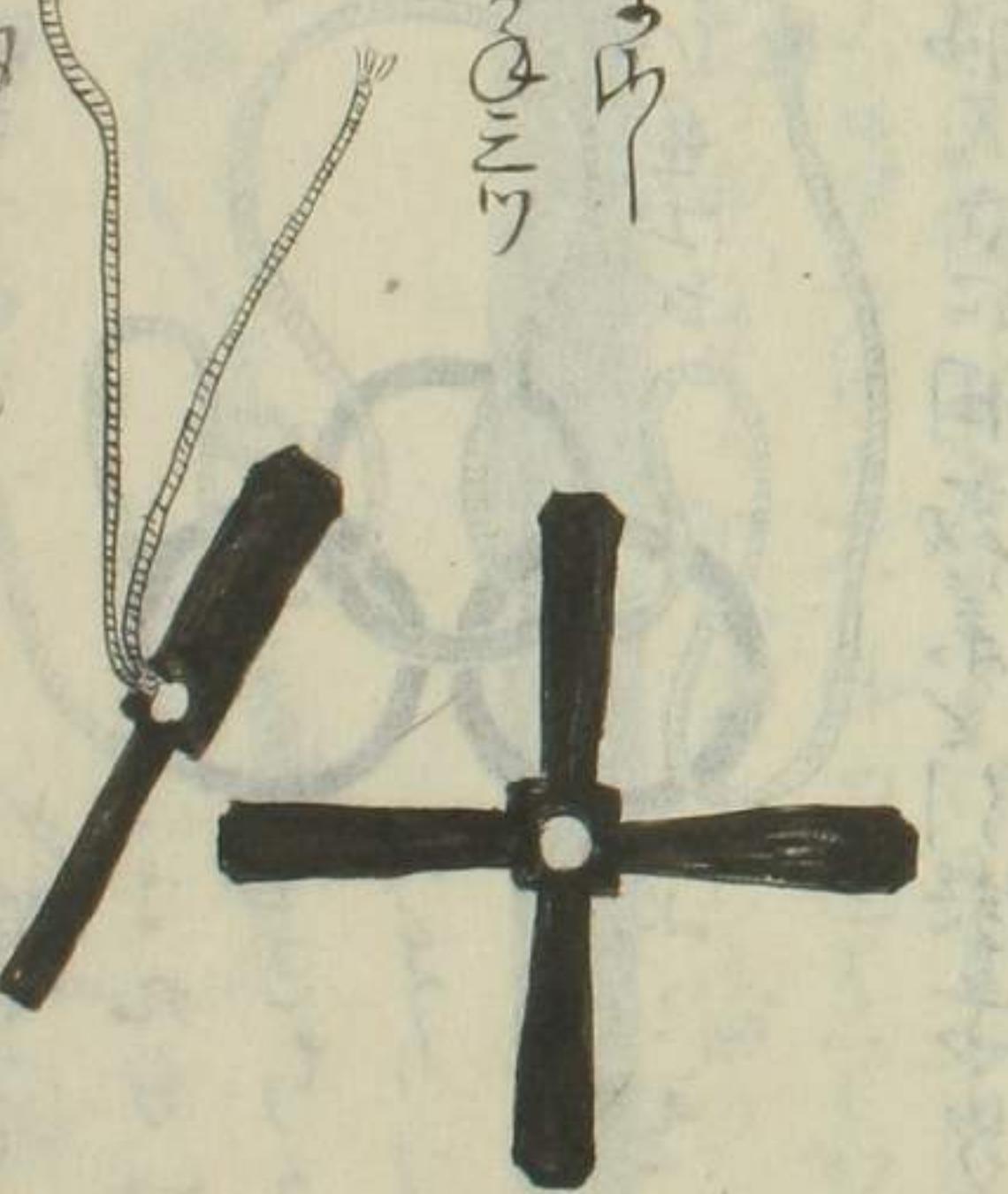
も事のよきと肝弱みて、てん序とお乳達とて、りは  
玉傷のよき肝弱傷と馬と鷹下痛用之ば、おとて  
うよ化て肝弱と馬と鷹下痛用之ば、とて軍馬役用之ば  
肝弱もくとくは

要馬秘極集卷之七

左方仕掛

六方歎

歎之卷第一

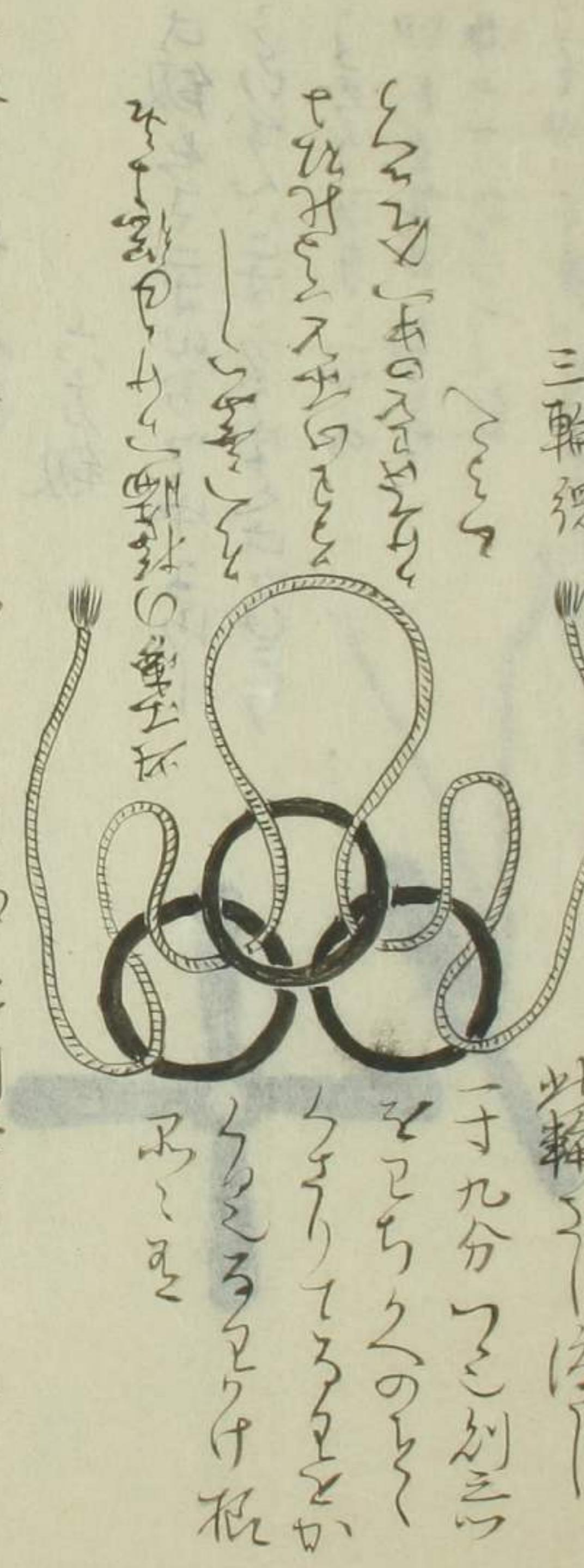


は歎ちてニチルウツ中ヨア  
ミラセんニキテテトモテクニワ  
ヨシテテトモテニツメ  
切り口セトアモセ  
中のアシトテテ  
ヨソツテ風モボニヌ歎ヌラミ  
大歎ヘテシノトモシノトモテナリテ  
の件のアシトテニツメ終リアモトシ  
ヨシテキモトコアルルヒエトスルトモト  
ルウツム曲トヨサセタリ内モヨコフルトモト歎ヌの

ソシテリトロ中ヤシモニヒト吉留ヨリツリツム  
シハシヨリツリツムシテアシタシムシムモ  
ツクチアリモアリナセシキヨシモ既存シテシテ  
アシタシムシ

三輪櫛

此輪ノ三



此輪の相不定にて筋毛等に用或兼て之接モリ

効力

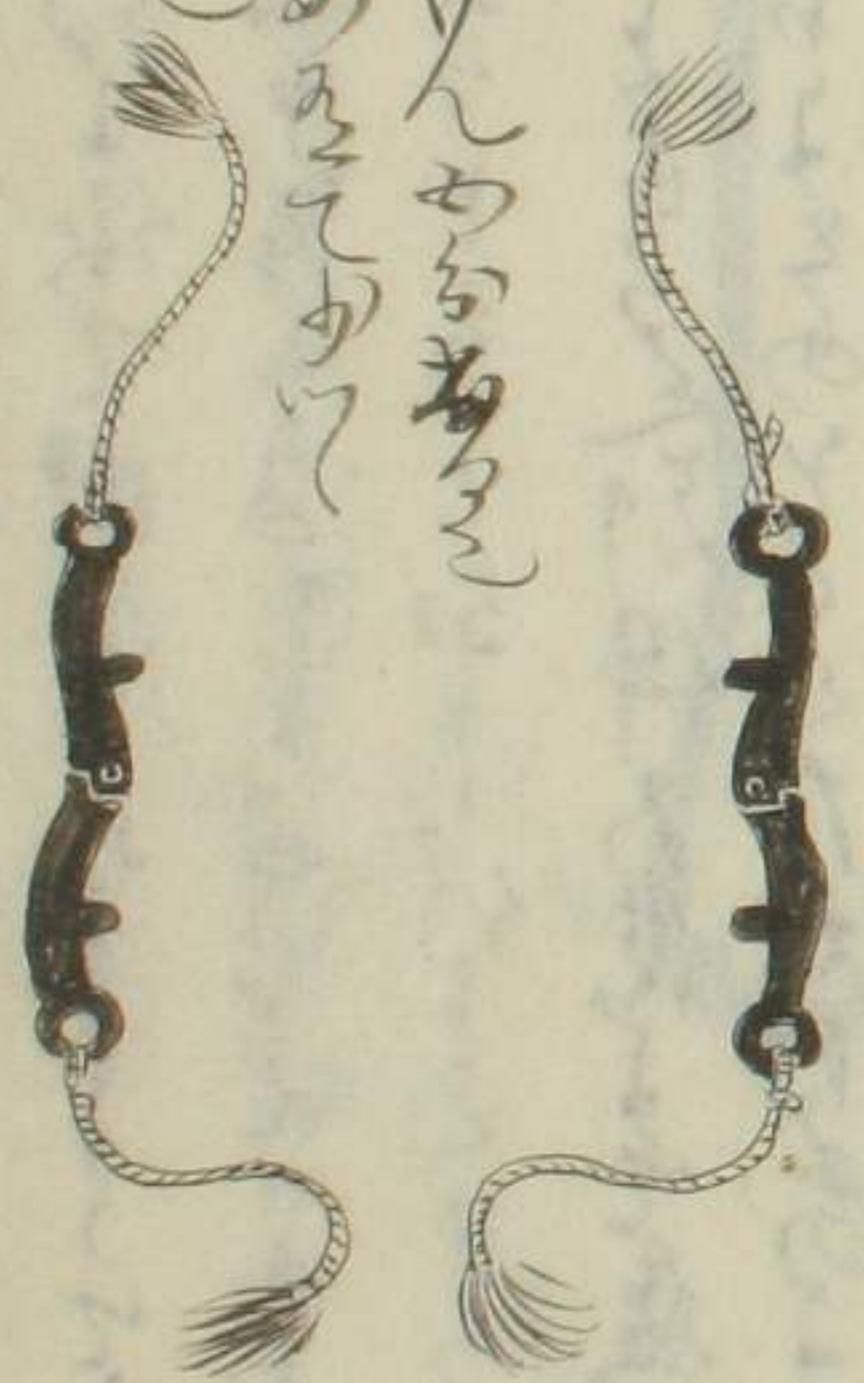
此物とまよすやシテシテナモそのまうとほこのまうとま  
シテシテアシタシムシムモアシタシムシムモアシタシム  
シテシテアシタシムシムモアシタシムシムモアシタシム  
モアシタシムシムモアシタシムシムモアシタシムシムモ  
用毛と同様



此物とまよすやシテシテナモ

此物とまよすやシテシテナモ

あつさ一もたんのせんやもあそ  
れとニテモ中よかちのみてりつ  
たましやうひもるあそ



遠指

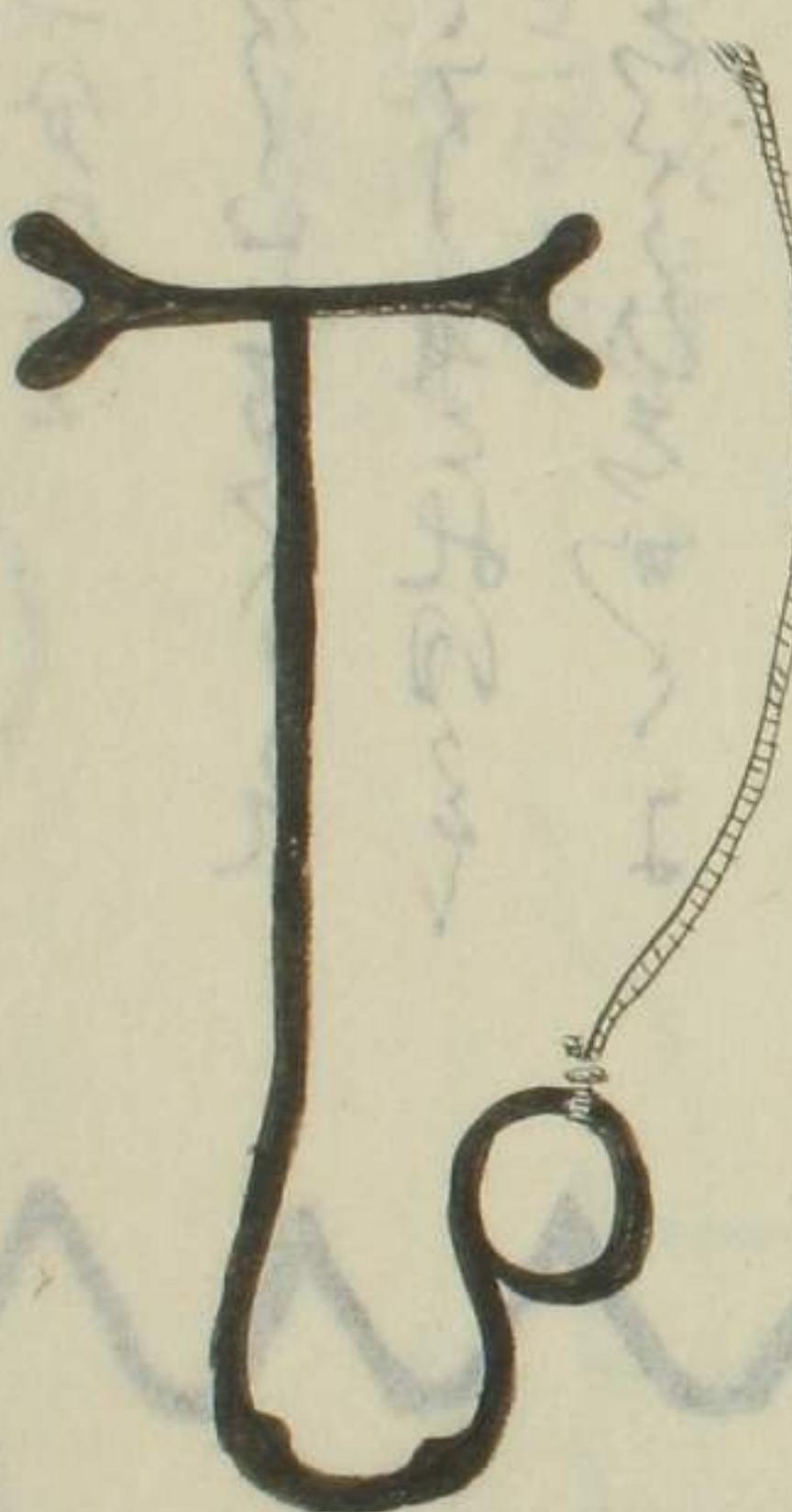
左の如くあるらるのまもけりとひえ  
今もかくはくをかくして肝年もさうすおも  
事事場の事に不直す事多き事の事は  
うとけた」とうりうとうとく  
の事ももももももももももももももももも  
ももももももももももももももももももも  
ももももももももももももももももももも  
ももももももももももももももももももも  
ももももももももももももももももももも

通化

が細ぢて手の部分のみを用ひて之を

九之二分

卷之三



は細つそれらうるかくらかの小角は外百曲了用て

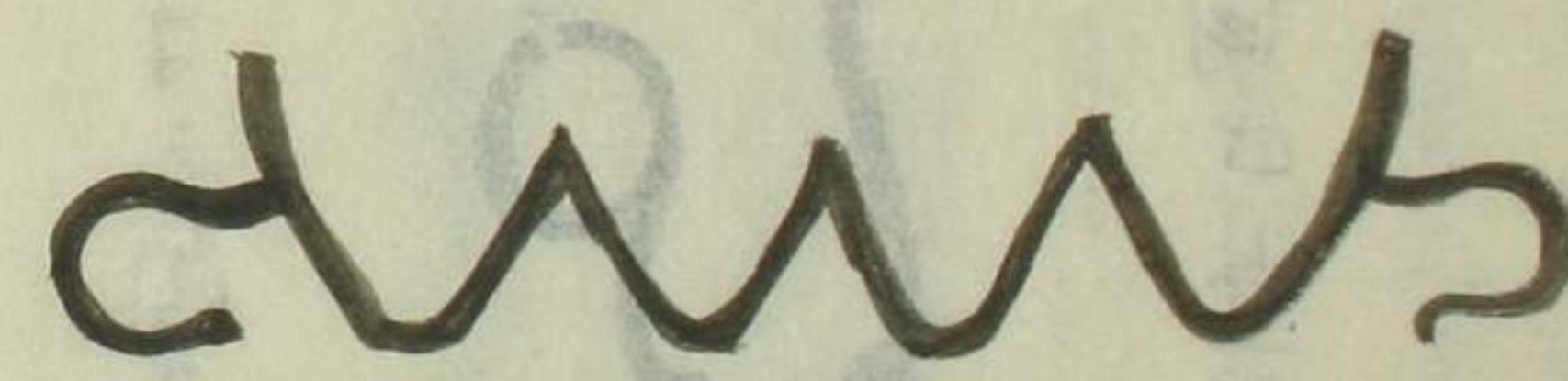
异  
叙

は歎きのまゝに死んでゐる

卷之二

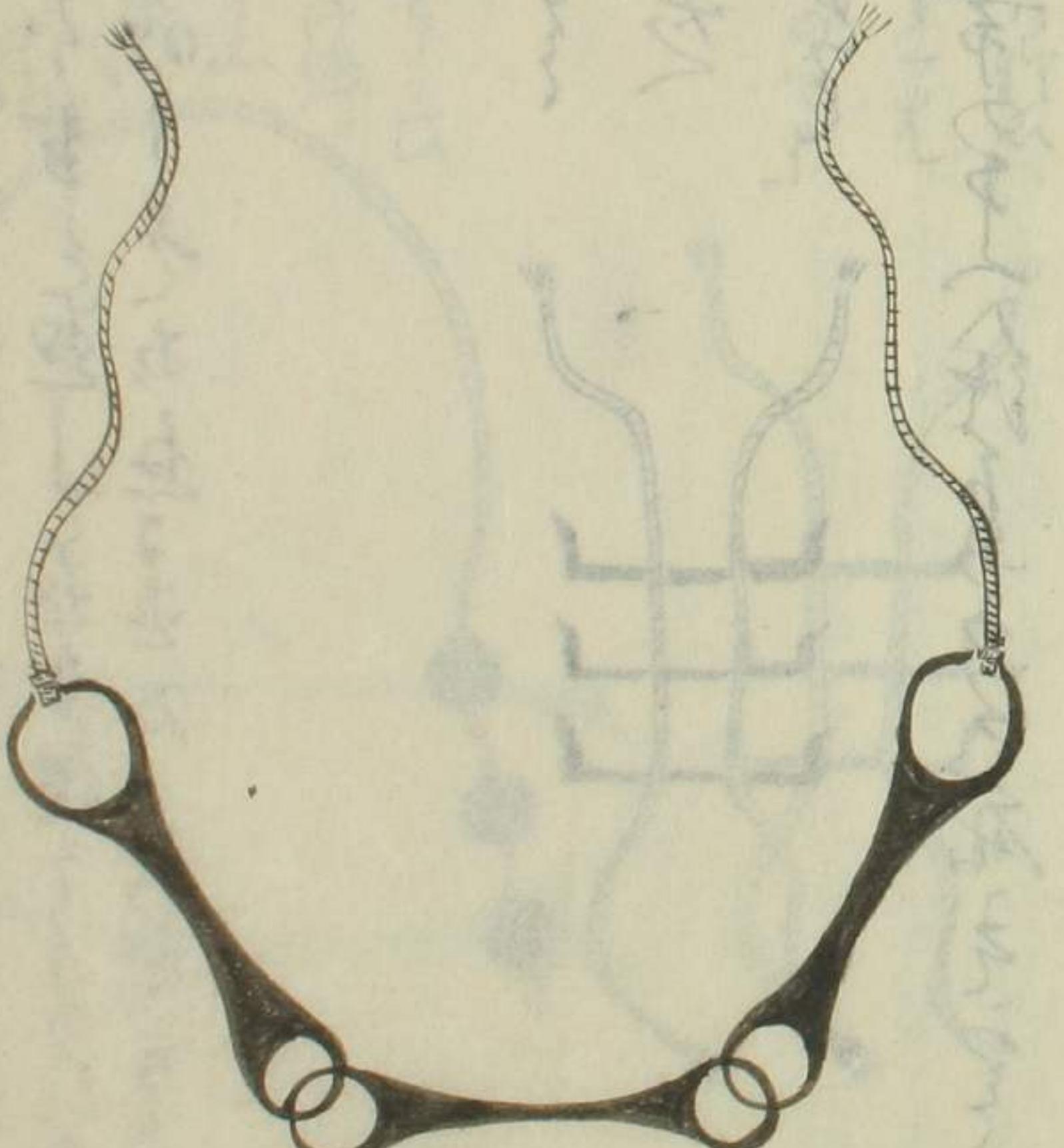
九月  
庚午朔  
己未  
庚申  
辛酉  
壬戌  
癸亥  
十一月  
甲子朔  
乙丑  
丙寅  
丁卯  
戊辰  
己巳  
庚午  
辛未  
壬申  
癸酉  
癸亥

蒙古文



# 食相

は知るもあひ事  
ほどのえりあひ  
ゑほつまきにす  
せうふと一分せき  
もとくのれいゆ

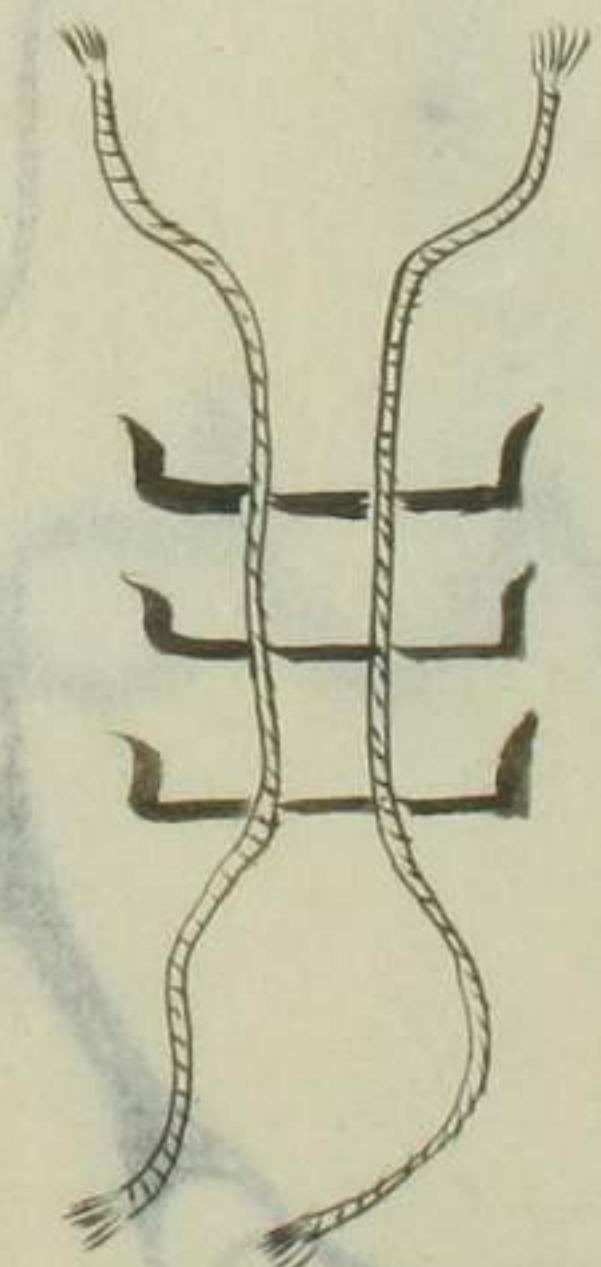


右の細い刃の相あ宝」を事とし、此を内にモロ  
ちも外して、左のものうちもよろしくを終ととぞ了りて、かづまく。

之もアリテ此ノ事は勿シの事也。手を拂ひ口相付て  
而も其取扱い難とアリケル事とほけを拂ふる事か  
タクシケル事と申ゆてある事と此をモモト書ハ  
シテ有り。又其縄の如きは、此ノ事にて其縄の如キ  
ハシモモトの事也。アリケル事と申す事也。

### 忍當

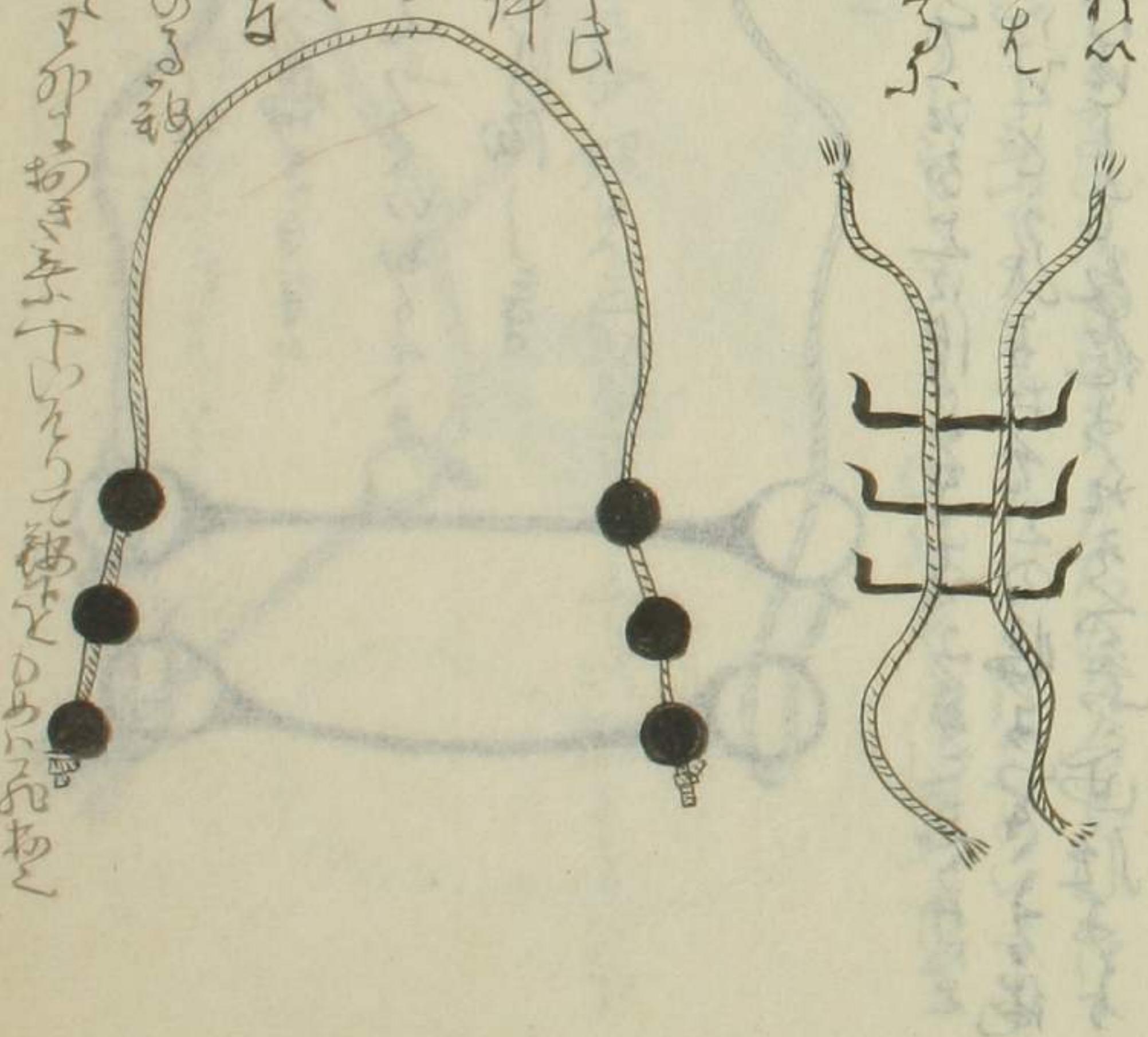
以御事。御事。御事。  
一分半うちまつても五分。  
半分以上もあらむ。  
ニ五分うちまつ後事のかへ給ひ。あらうと麻子をあらう。



トモモモ股事の時、筋  
毛の筋もアリてありとモ  
スカスカアリ筋の事。  
これと申

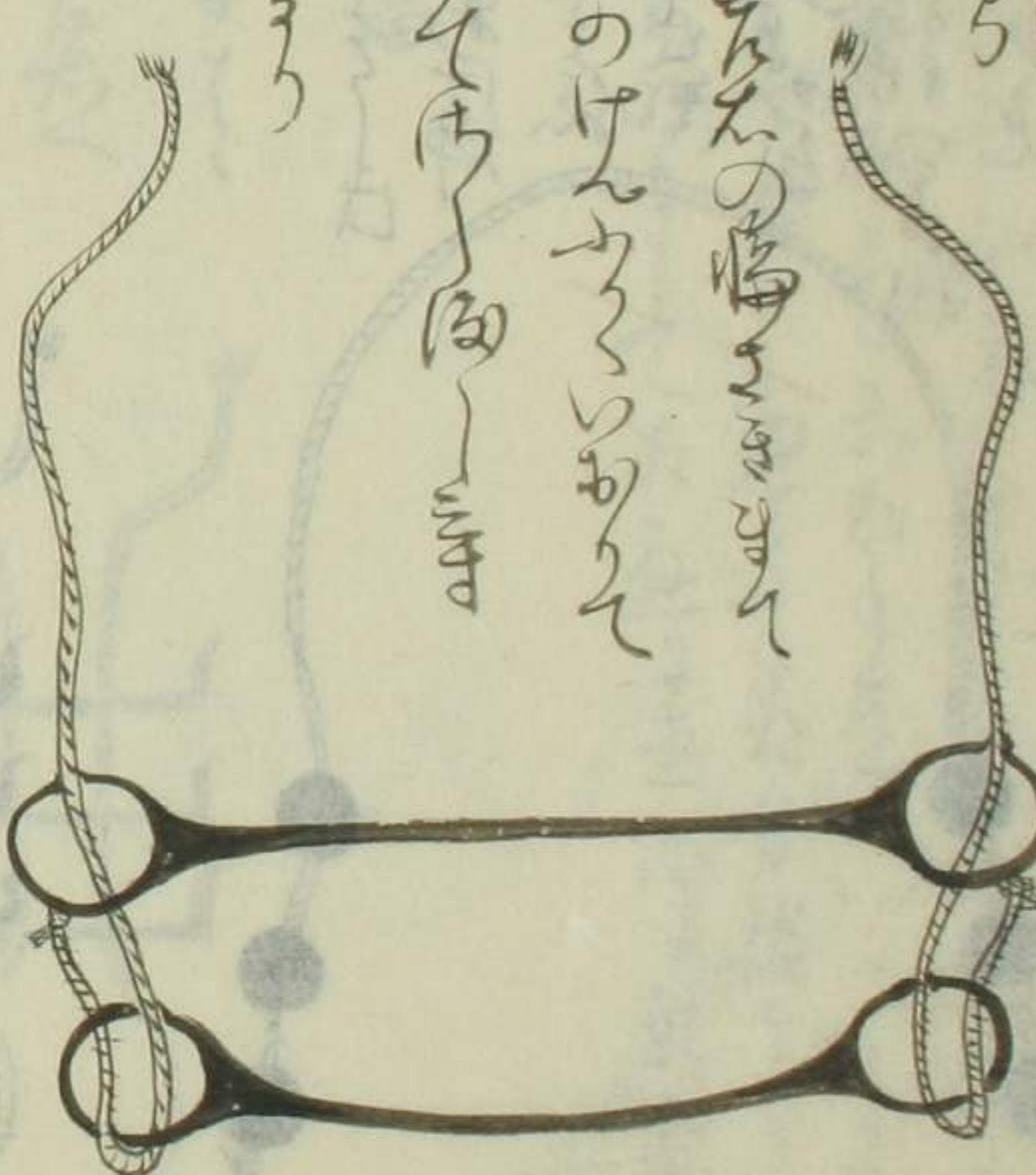
### 連玉

ヒヨウモモ股事の時、筋  
毛の筋もアリてありとモ  
スカスカアリ筋の事。  
ありとモモ股事の事。  
筋の筋もアリ筋の事。  
筋の筋もアリ筋の事。  
筋の筋もアリ筋の事。



二重引

け劍工の手とみる所の腰をまき  
三寸八分を二分下の腰からひりて  
たての腰をまきて腰へまく  
にあたる二分半をう



ちの腰に口をせき強めしてねらと口をすくめるの腰とこくすと  
の腰とをあせとての腰ととくふわあてとの腰とつまうる繩  
とのさうりととじてしておむれとくまく曲すり

上の腰に腰をまくことの腰とくらべて腰と  
の腰の件の腰とくらべて腰とくらべて腰と  
つまうりとおねせりとくらべて腰とくらべて  
そくすりとくらべて

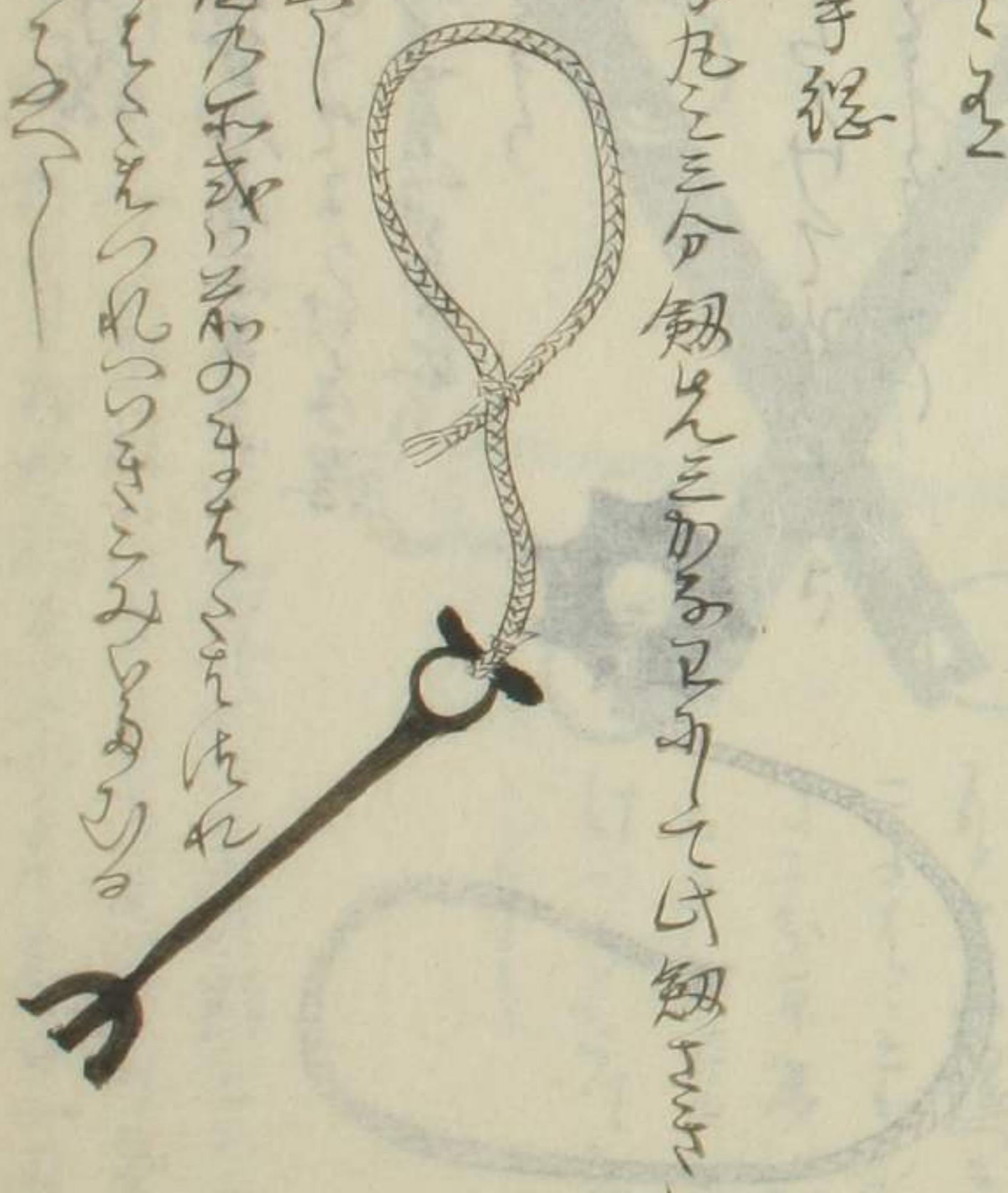
歛手緒

け歛を二三するを三分歛を三かる正かてけ歛をうる

そくすりと

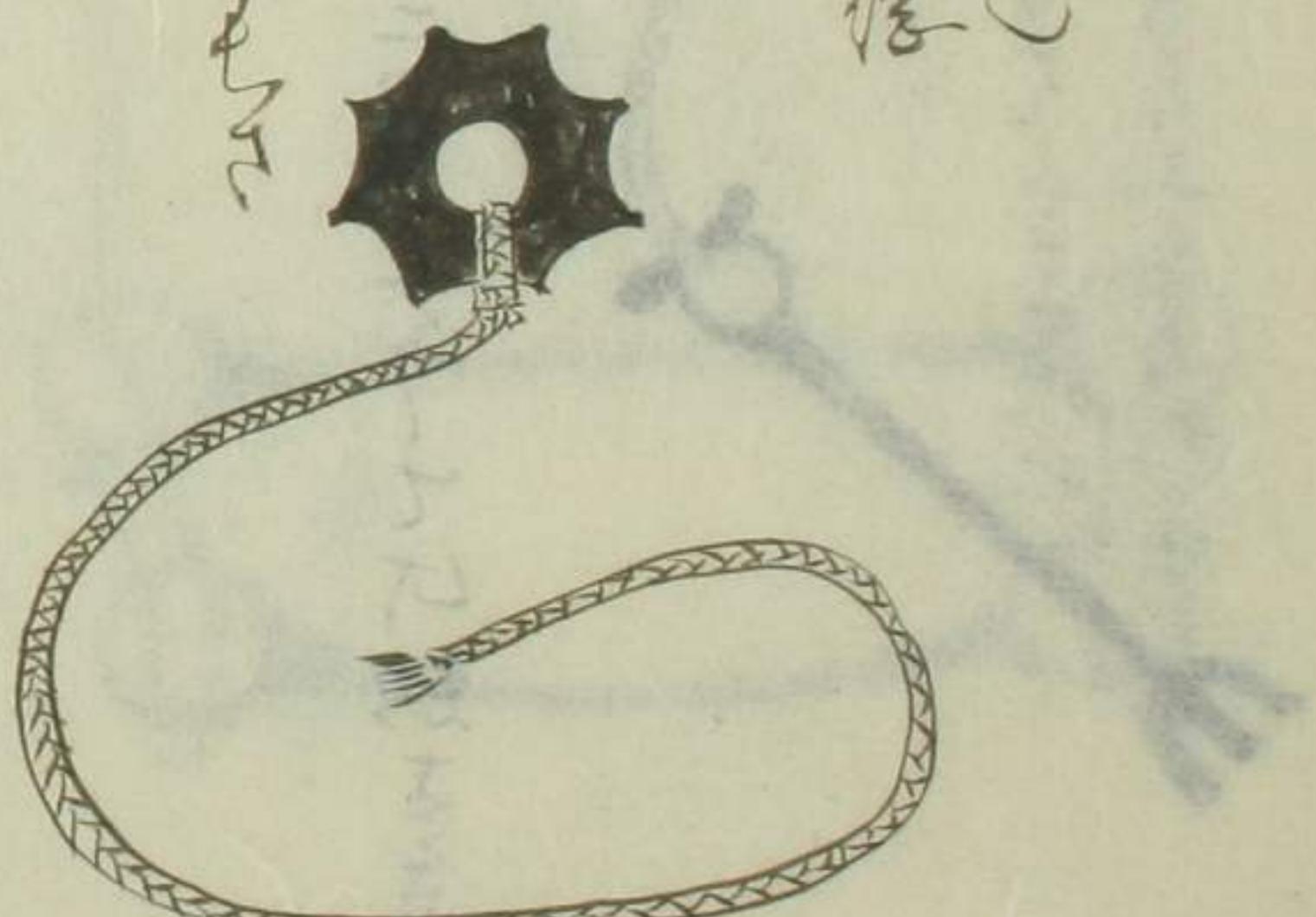
ののひふり歛

を腰にまくことの腰とくらべて腰とくらべて  
の腰とくらべて腰とくらべて腰とくらべて  
の腰とくらべて腰とくらべて腰とくらべて



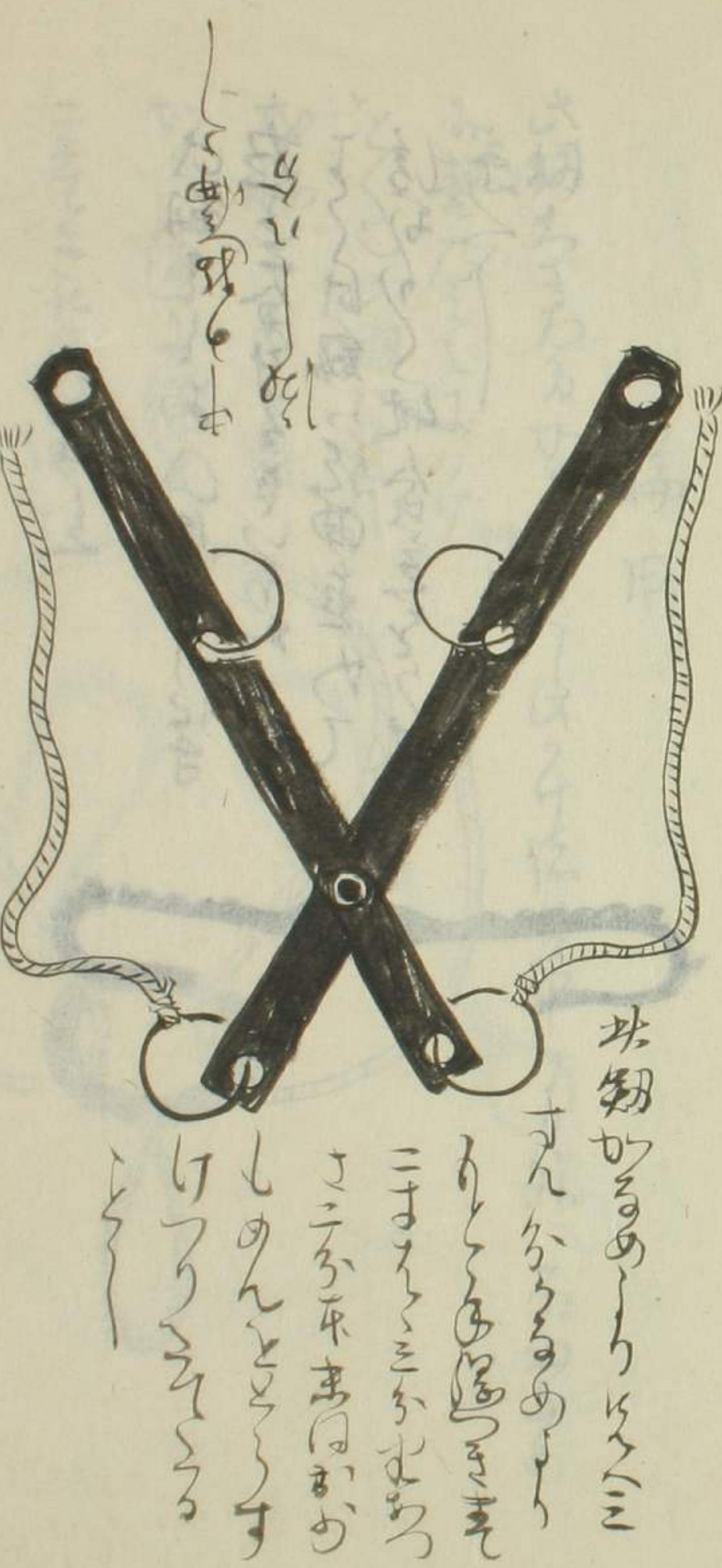
助手錠

は鍔に二角八分八角あると  
けりつてはとんのうてよけを保  
つたるときあるとてよけを  
けりとてよけを



力要

うへ縛るひらてやめもて  
一走りくらうとてよけを

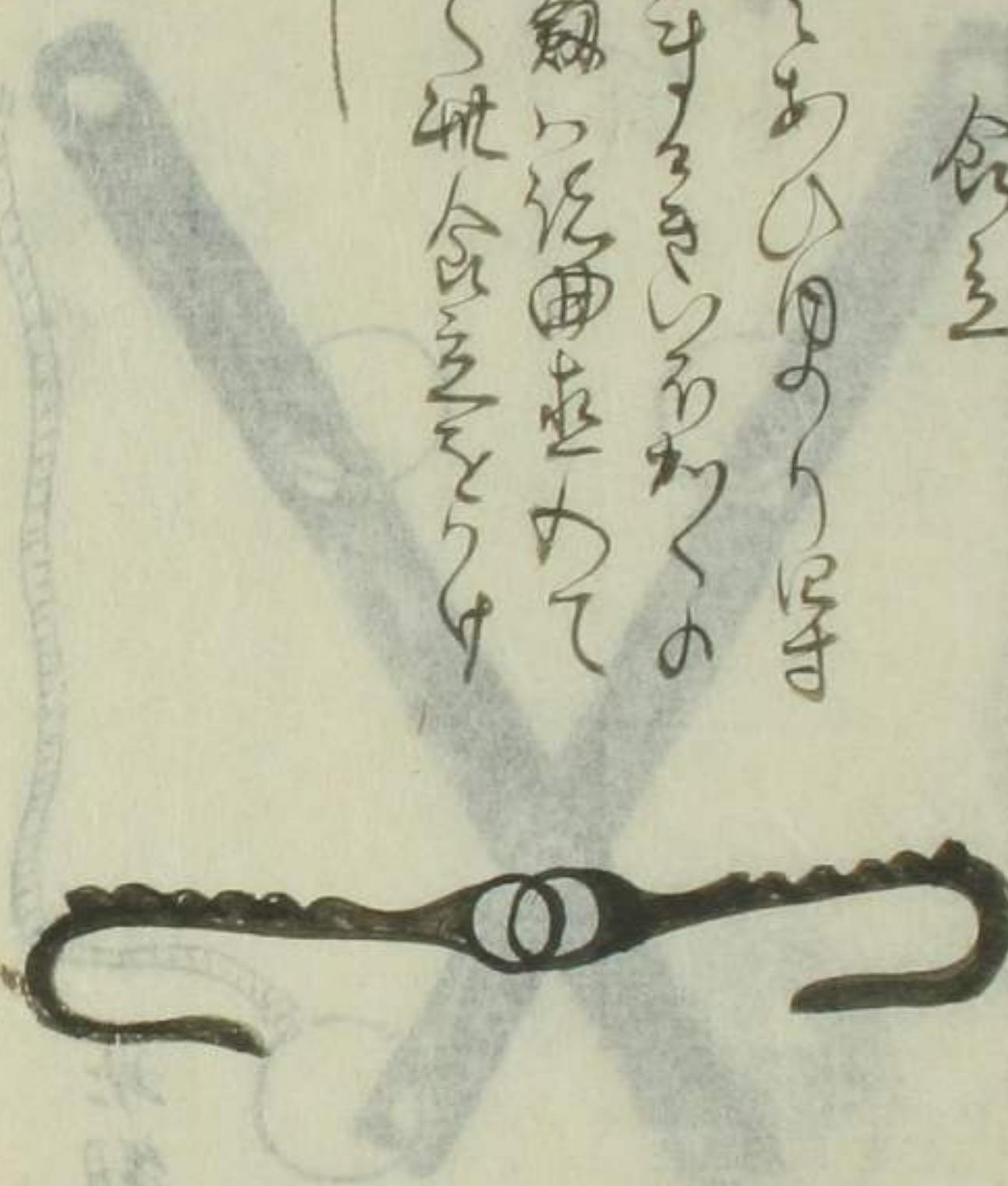


石井の力要連のよ用ててあわては鍔とあら  
ひもうもるこすけうすてありかよめをちりそ  
ろくおこ復て返れぬれやあまよんあり日

たるのへまもとあひとくとせは劍のつまみと  
しキ劍のひらわらと即ちエカヒラのひととせも  
とせも

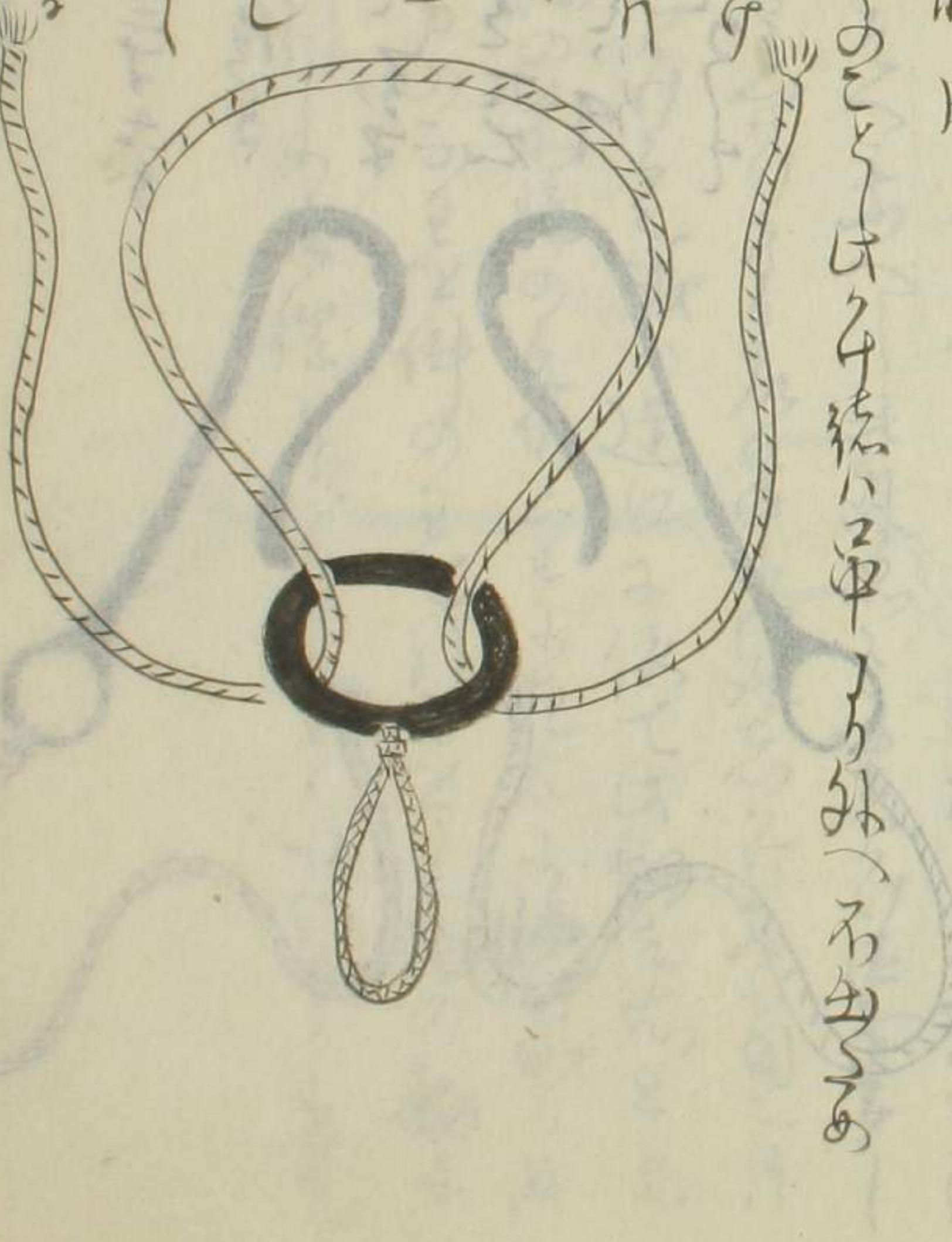
金具

は劍のつまみのゆき写  
ねと三分するをあわぐの  
とく日劍の近面並めて  
はさりとせも



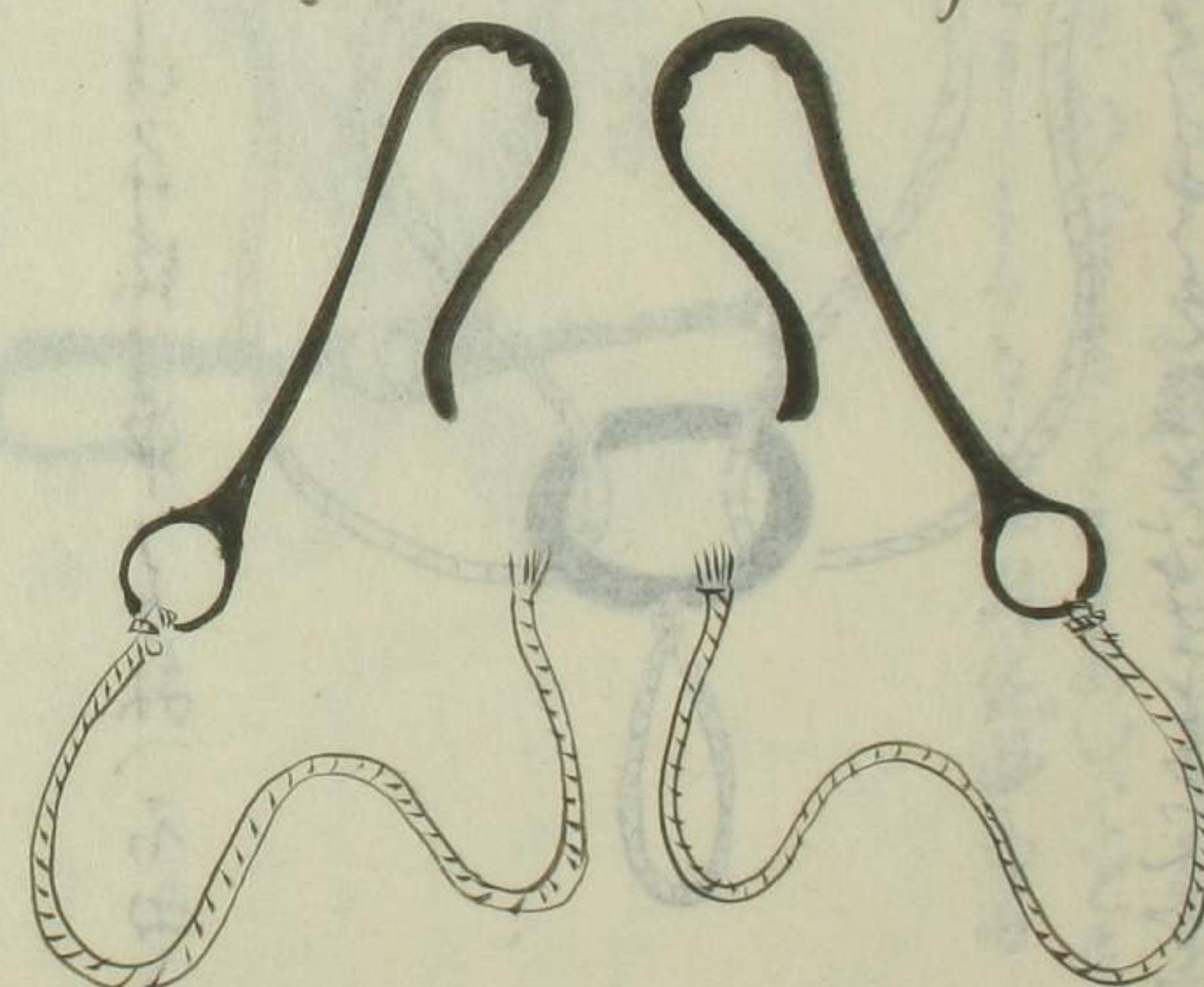
専用

大劍ちや方かのことげに子孫ハ申うち外(不生)て  
ふ書下ともより  
とくは劍の足  
加賀とあす用  
ひに通す絆と  
二重よれをり  
すのうもと生ア  
引けたりとす  
と喜びの事にきみの事にきみの事にきみの事に



洪武

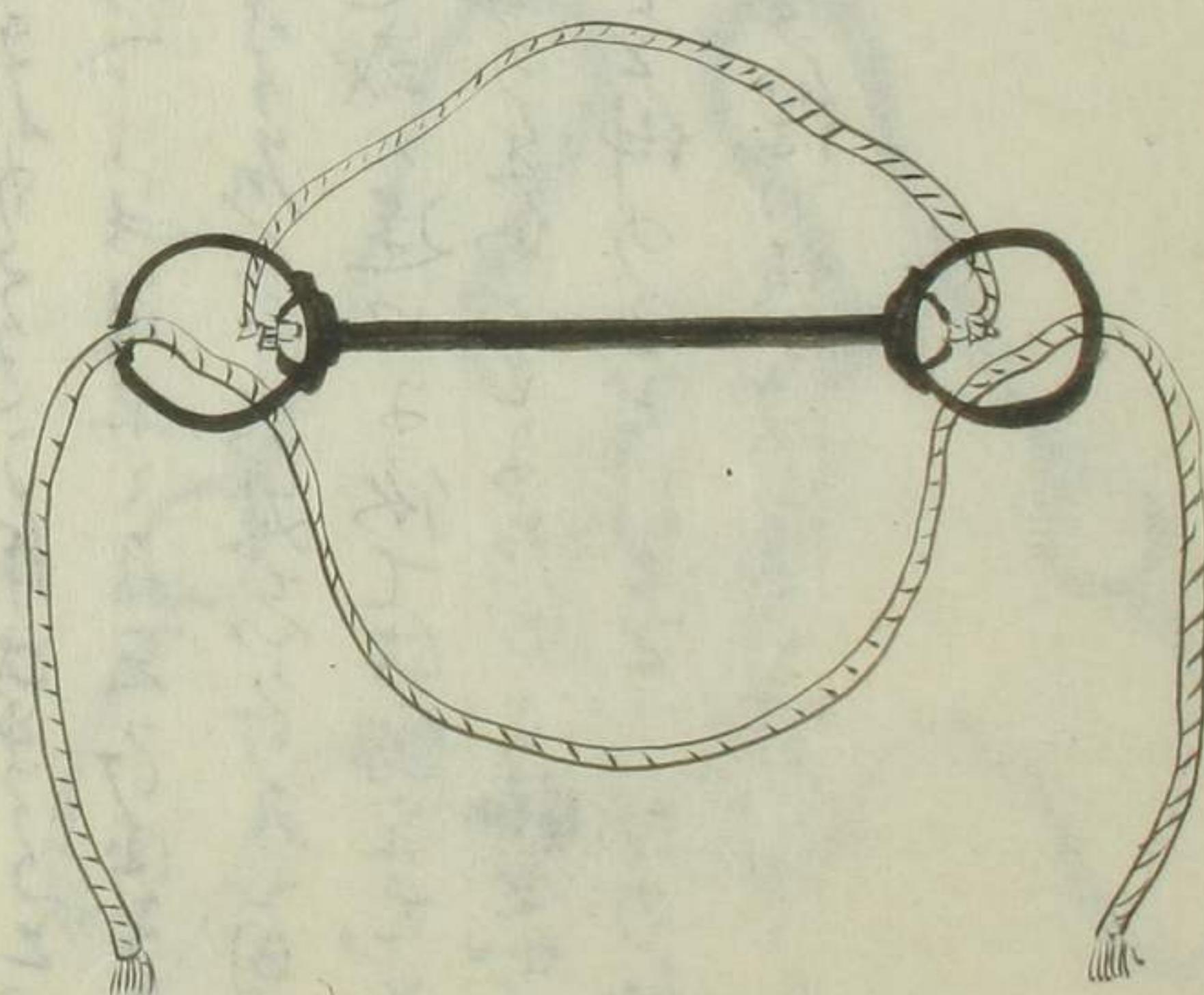
は鉢のまゝすこし  
外乃ちもはらへ  
え三すみかたを取  
内の方よかんきよだれ  
日々草しておにけ  
もとよきゆゑう  
乃すら



右は知りかへておれりまく、この用ひまことに  
行ひよるよれどもアキバ外ふとおけは多  
きまやからうきとくを車内みちづけの道と  
あ一方よそうりと城い達はよれてせめんとも  
よもぎ用兵の本領の多かることわざによ  
りつづけたるのと併の事とてその廟宇  
あるをゆく所へゆきむと

解卦

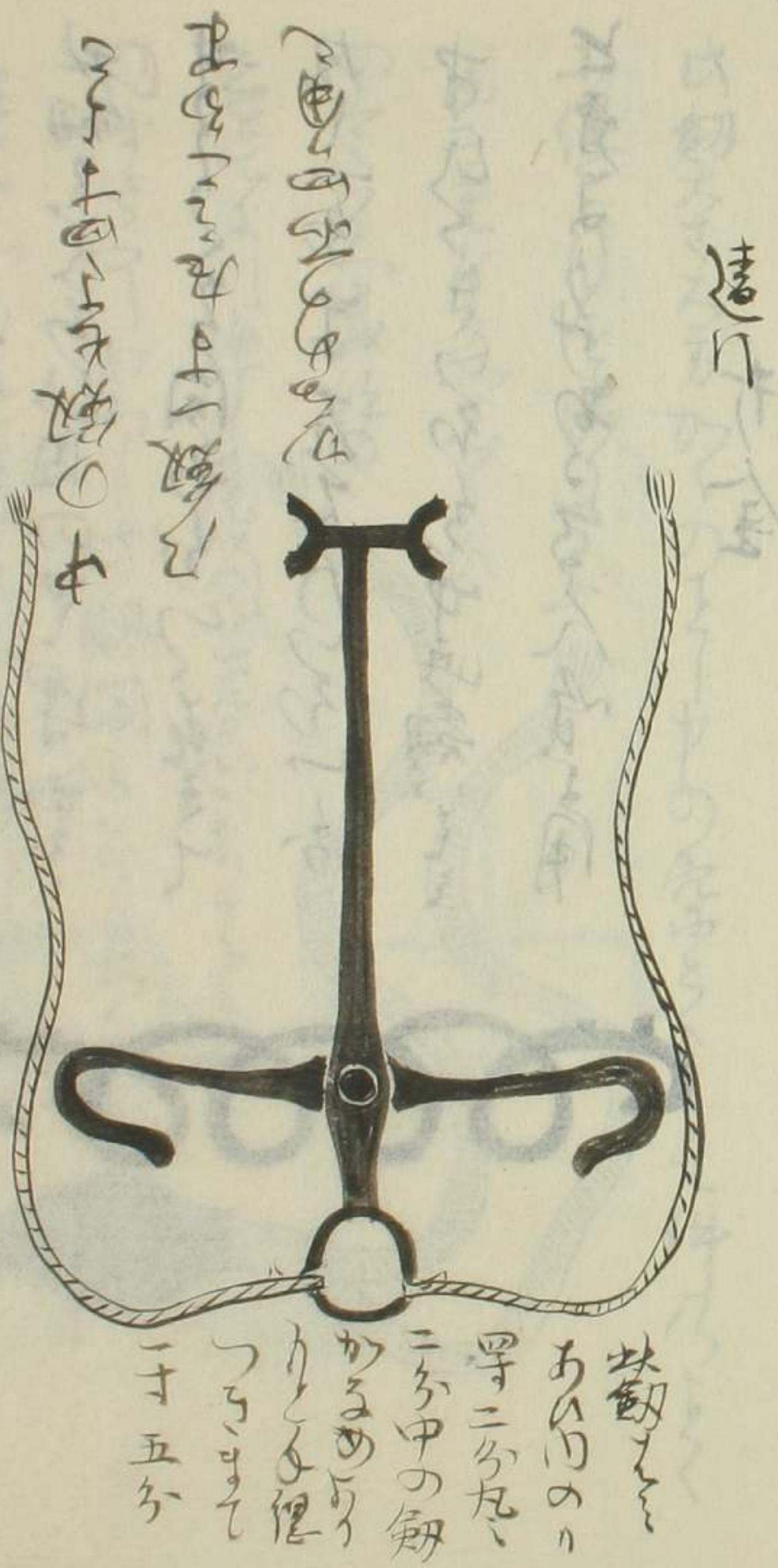
此物をもひ三寸  
たるの幅で一寸  
四寸とあらすまつて  
ツルをもあつて一寸五  
寸角こぼりのつて  
ひよけをすくふる  
八分のしゆをすくふる  
ふるてあつて



左は細い海ガモのする用ひにあつて 佐助やはじめ  
けまほむちあひては海ガモのそばとて 振子をも  
第一は振てそろそろをひかの後手とりとて ひとと  
まもりてひらかげくくると前手とて ひととひきよ  
こえまつて あつて絆のうねりとて ひととひ  
く 佐助やまほむちあてひくのうねりを

右下  
此物をもひ三寸  
たるの幅で一寸  
四寸とあらすまつて  
ツルをもあつて一寸五  
寸角こぼりのつて  
ひよけをすくふる  
八分のしゆをすくふる  
ふるてあつて

卷上



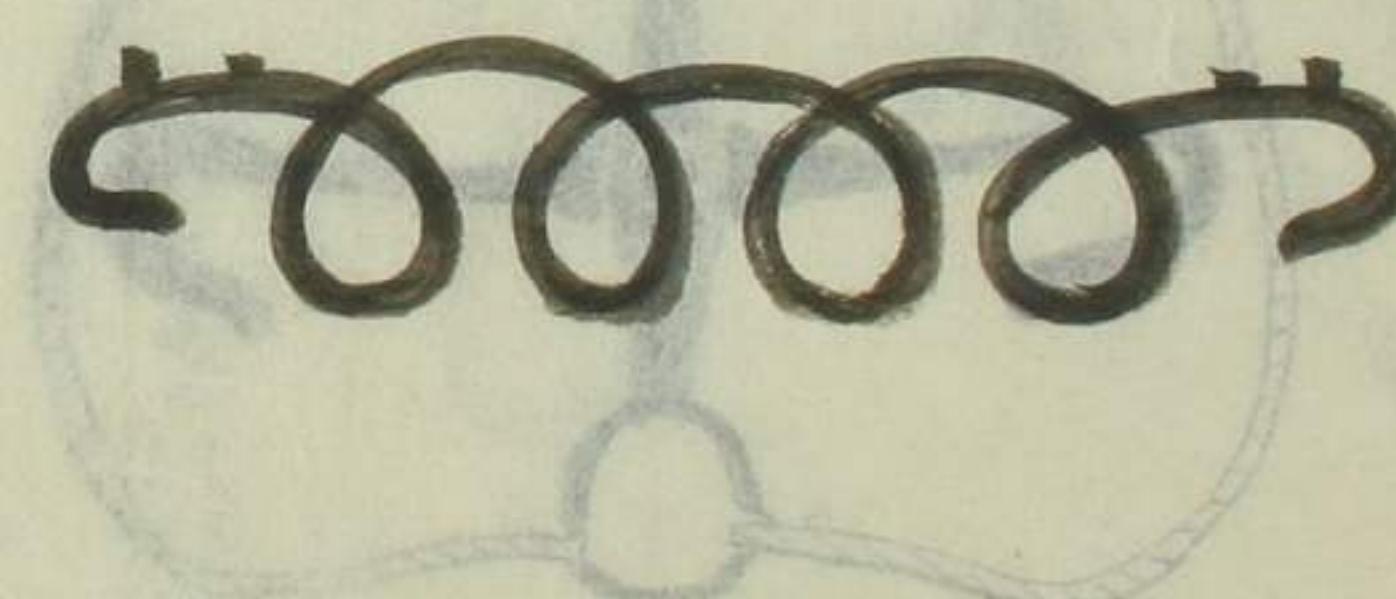
ちに知られぬと申すが爲めに我は汝より少くも  
多くあつて、やう通つて、一あらむきうちよしよし  
てまじまとれて、まつりゆきとす。たまの

経事とあきらめたりの三院とよし半月の内と  
けぞりに通るよほも九肉(神のまみ)と云ふと  
り生と死をもてて往還を極めてゐりやう

を力

其劍とあひ肉の足界す  
其劍と肉身をもつて  
其劍と肉身をもつて  
其劍と肉身をもつて  
其劍と肉身をもつて  
其劍と肉身をもつて

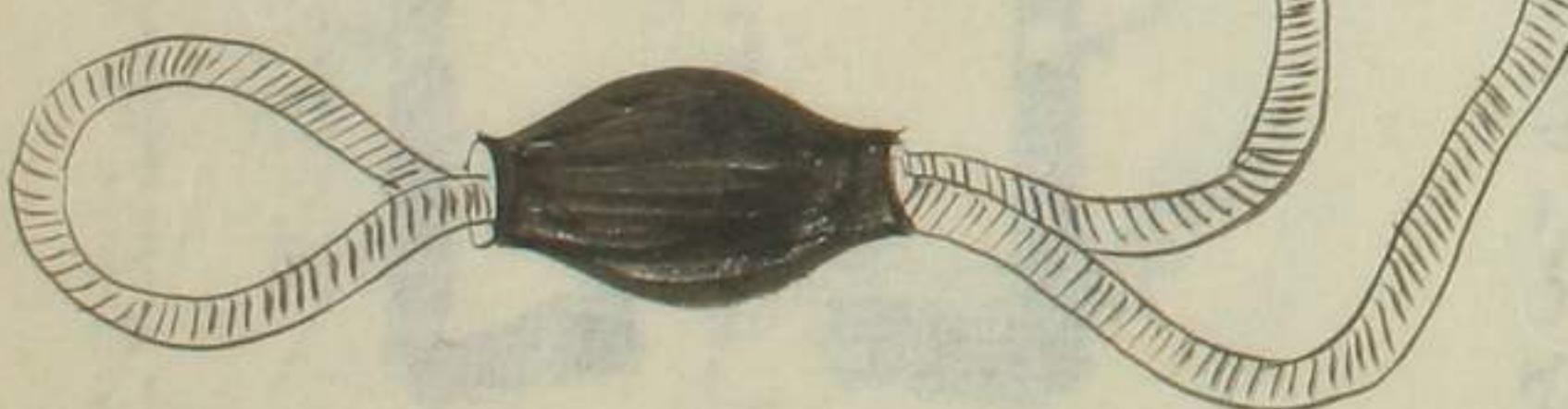
才金



此劍あさるあかくのミツヤの宝くして件乃と  
小便と口とぞりとす  
用二毛ケテモとす

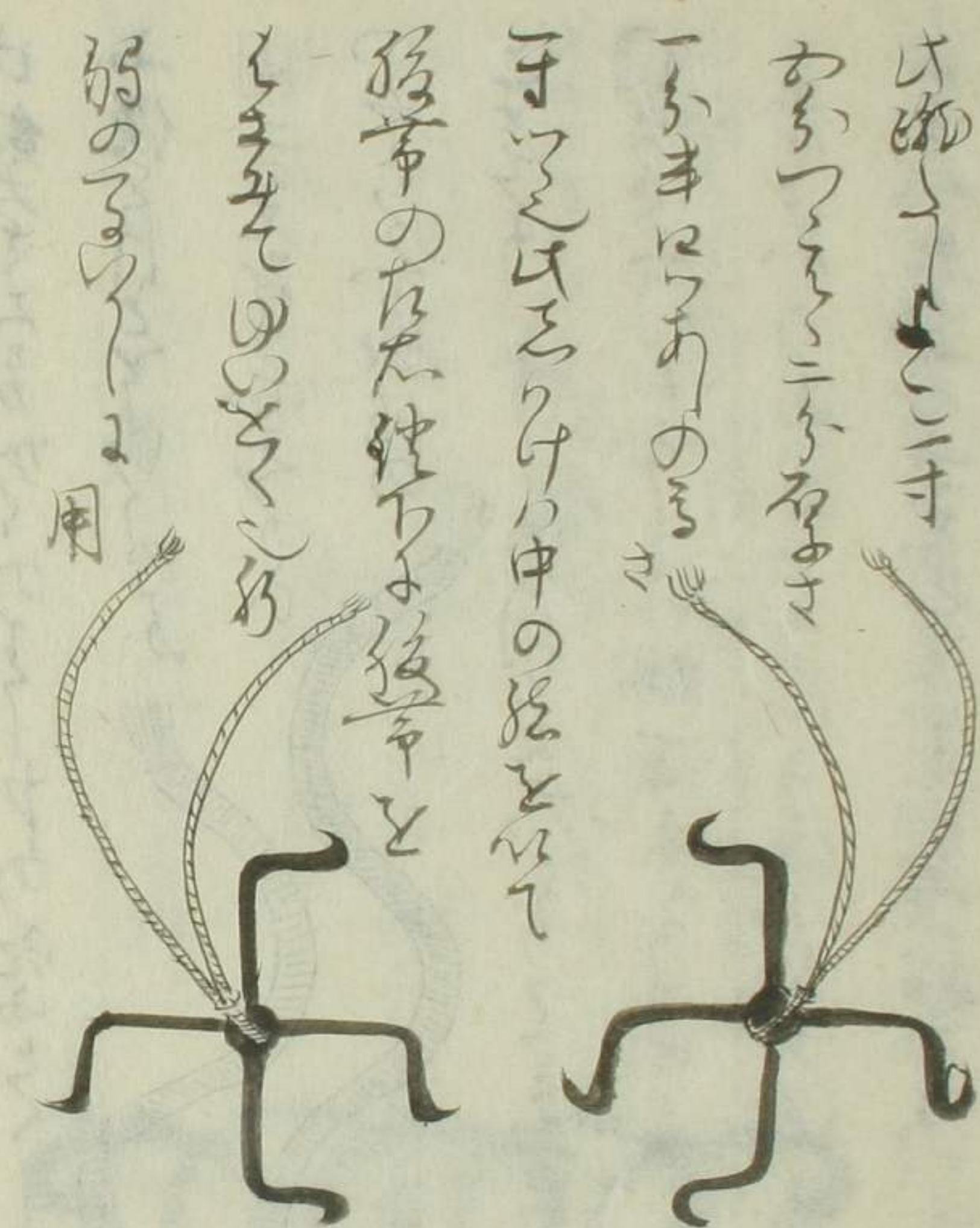
のそらと成終の

此劍あさるあかくのミツヤの宝くして件乃と  
小便と口とぞりとす  
用二毛ケテモとす



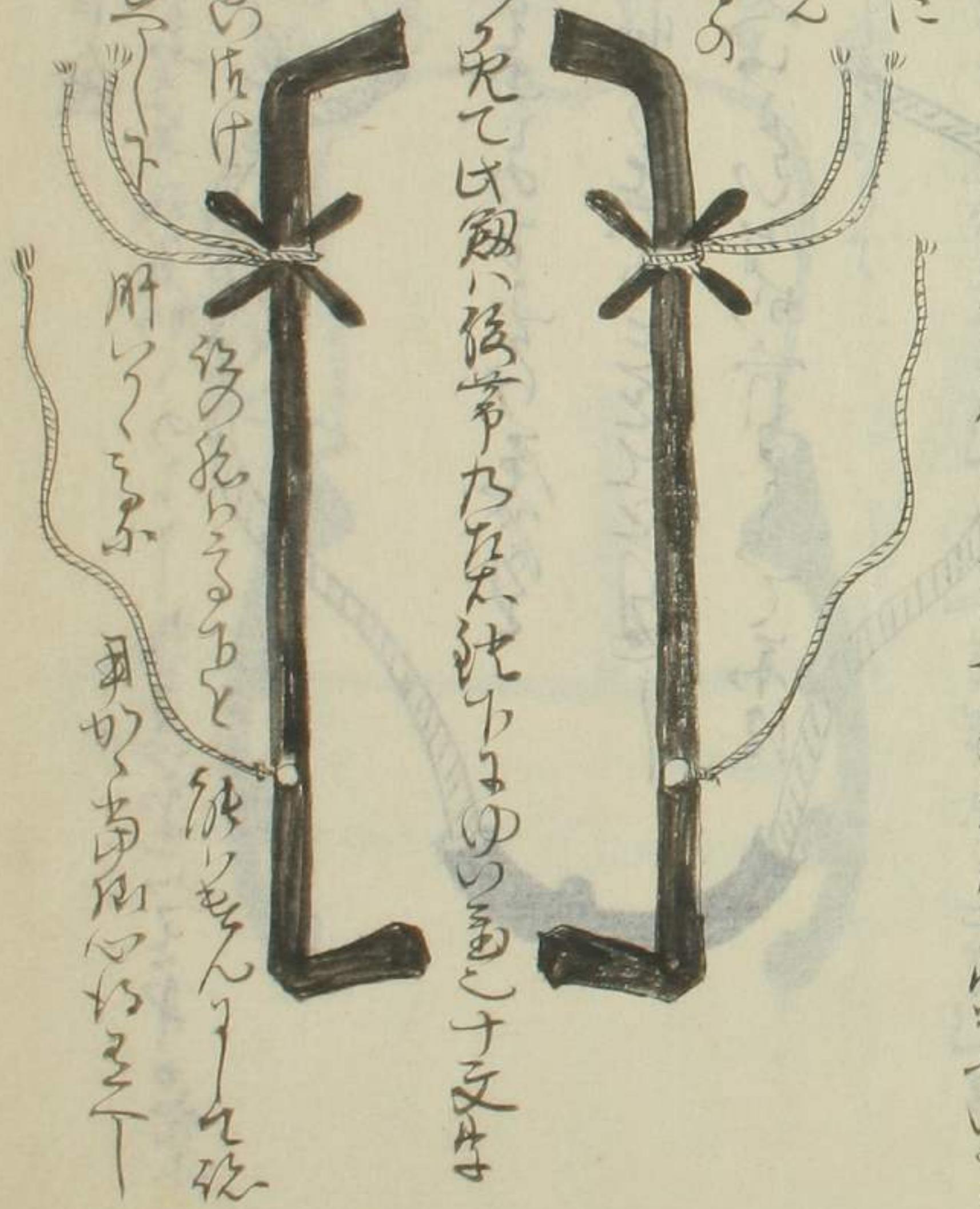
あは

角常



角長

はねたゞせをすかに二分半石すこ二三十文字八九字かつと  
アモ先の文をに  
ゆうせま鉤先  
の丸く切口ひらかみ  
鉤及び鉤先をも  
五半木の方つれてはねい後常乃至此下のつあこナ文を  
とそんじ事と  
さみしきあきゆの店け  
多のねりうると  
無むれんと  
用ひてよ  
用ひてよ  
用ひてよ



管金

は歎もすまちをかくのとへをうらみや。た

とくうけん乃五尾

とととととと

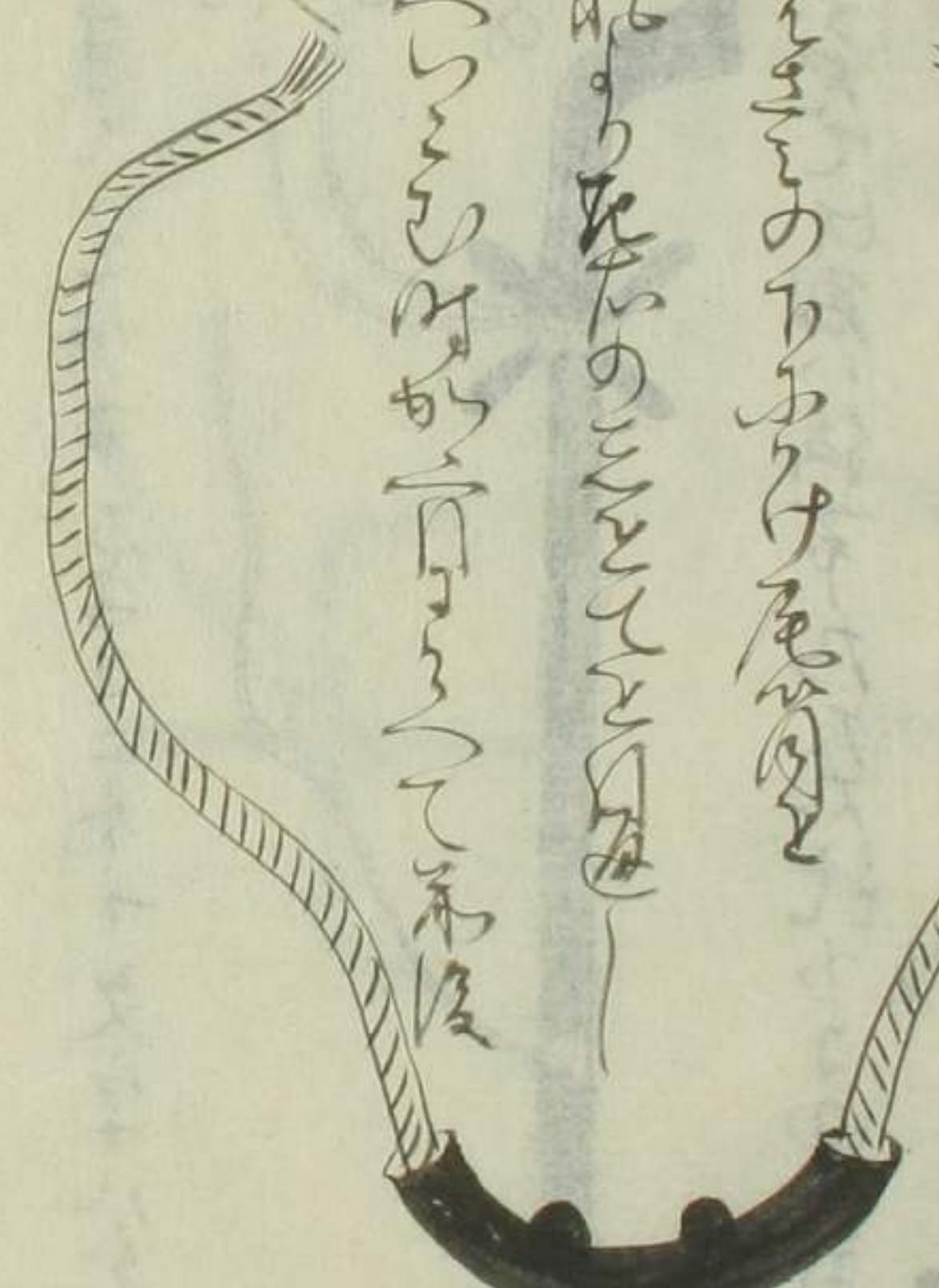
とととととととと

とととととととととと

とととととととととととと

とととととととととと

細吹



玉想

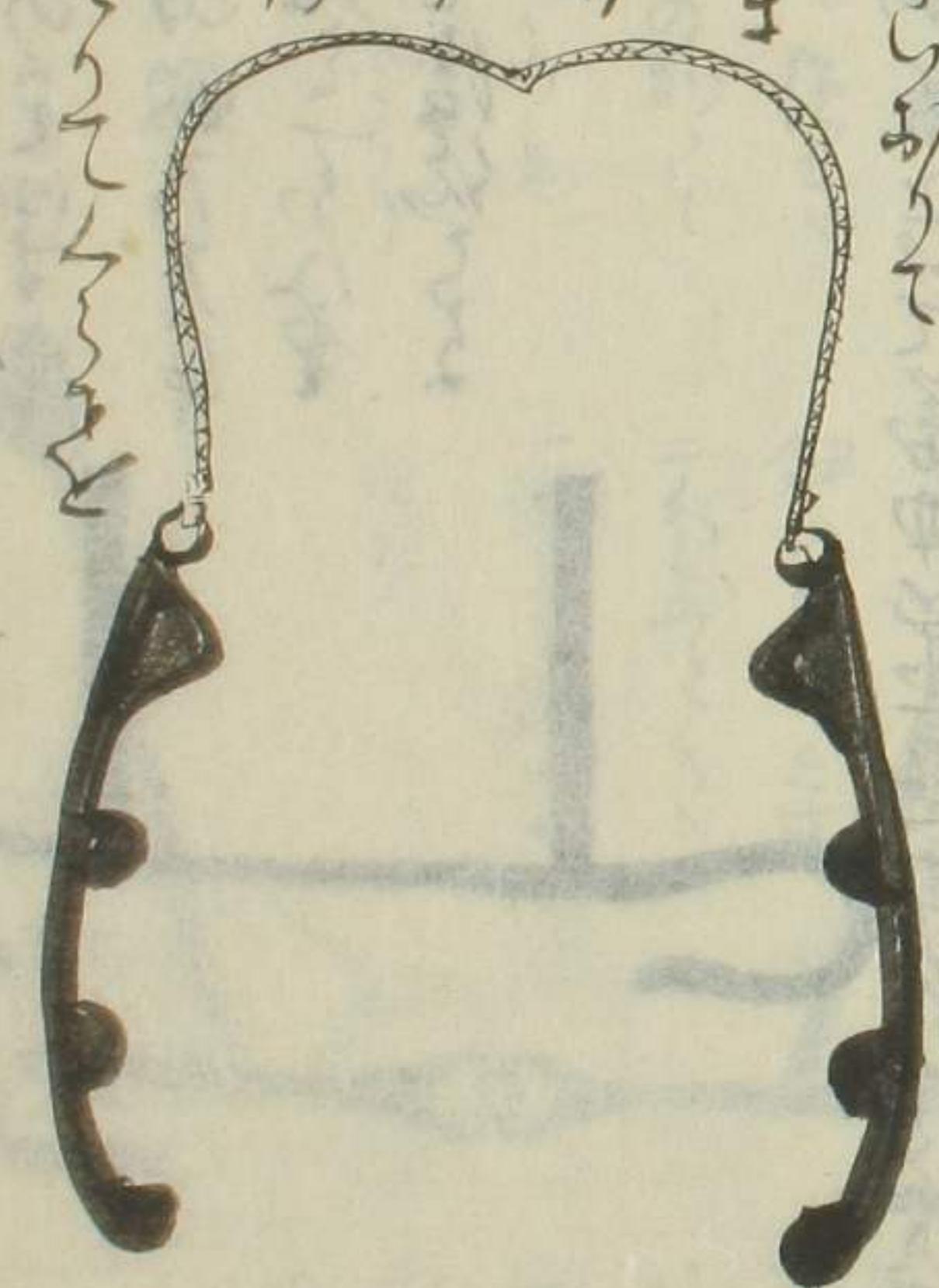
はぬくせむよとてうす手ひくと年丸こどもひく

ひくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

はぬくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

ひくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

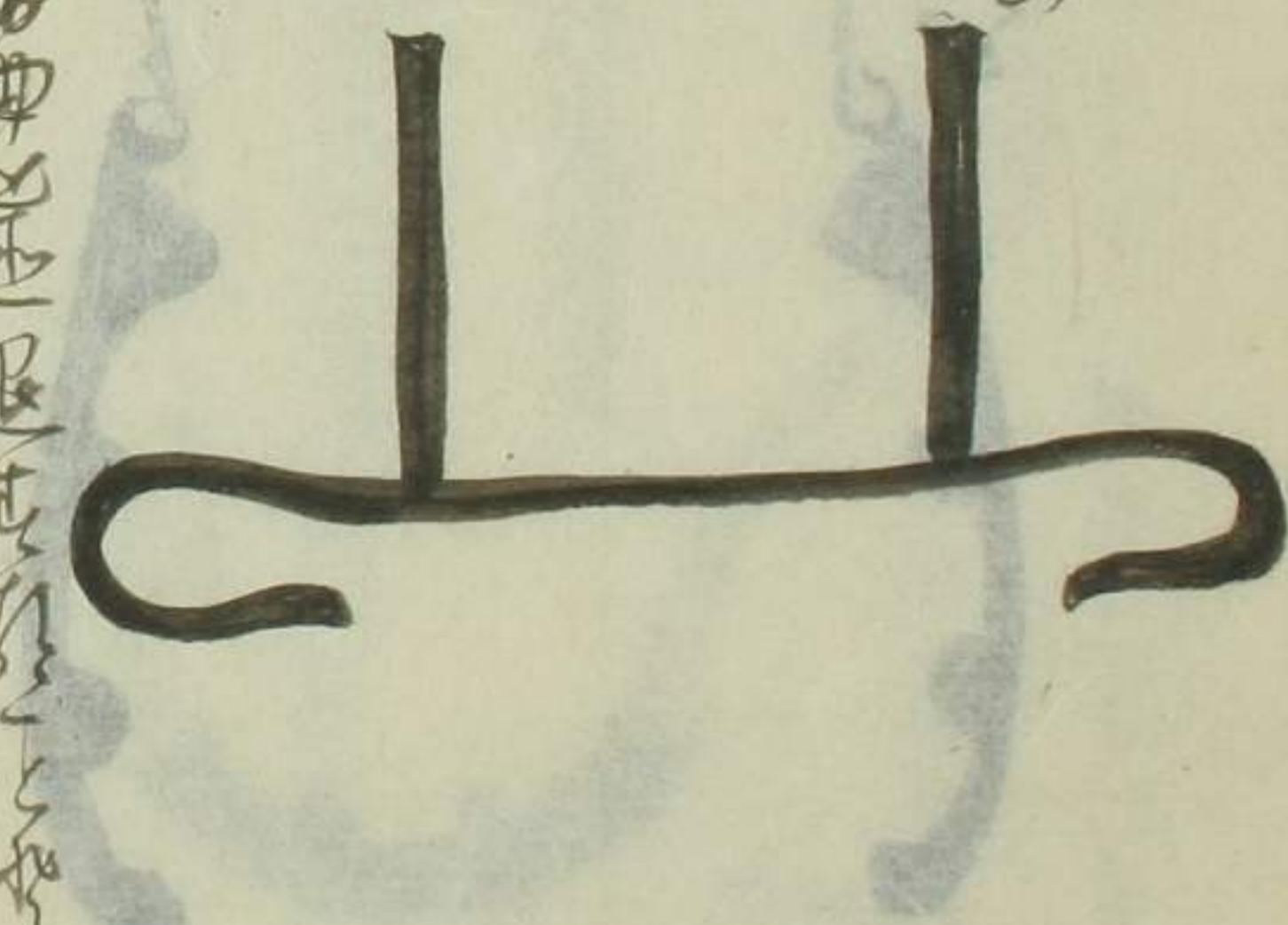
ひくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく



鉄柳

比劍をもひのうのと軍中の  
劍もてこよむあ劍乃る手  
四外のうちをもてては  
は劍に後回をもて候也

用



たゞ方擬劍乃柄劍として兵刃とせ退せたれども之を  
取手ノシヤよどり數多劍の柄多からんす事アリ  
テテハヨウスノシテ

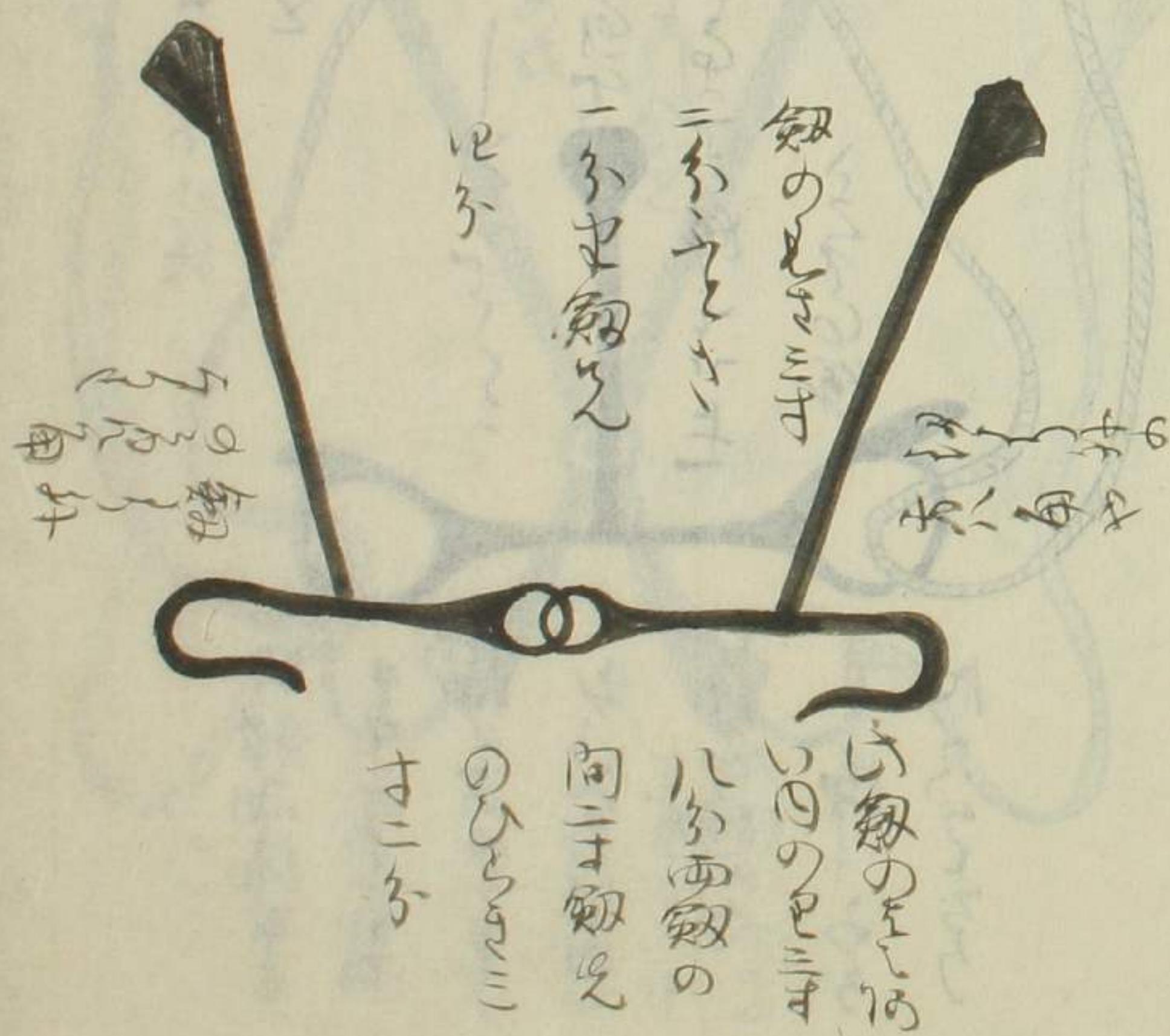
劍之表、第二

擬用上手仕掛

口劍

其劍の根より先を口と  
云ふ事は用事のから  
もとけみ極慢つし 一ふせ劍え  
ひづくは外ふる いふ

用



通劍

火薬の事とて用ひ下はる  
くは連の事とて用ひ下はる  
かくらうひてば火薬乃  
なた乃脇すとシテ

をあへにれて

色絵刀身と

筆毛と



火薬兩脚

もとまつわ

脇足のつま

歩ひるは

左脇足

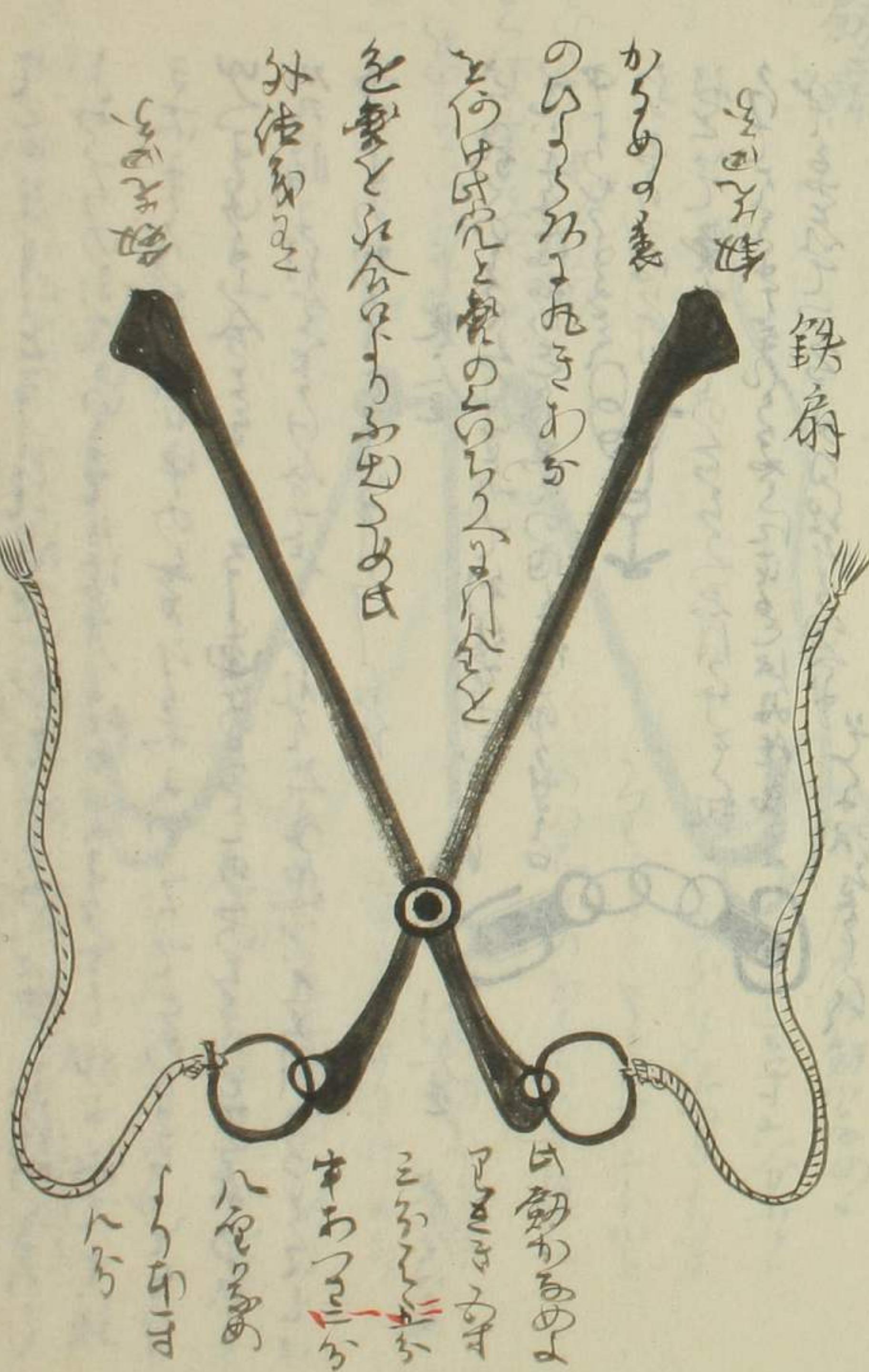
右脇足

内乃走り

。

火薬の事

鐵扇



火薬の事とて用ひ下はる  
くは連の事とて用ひ下はる  
かくらうひてば火薬乃  
なた乃脇すとシテ

をあへにれて

色絵刀身と

筆毛と

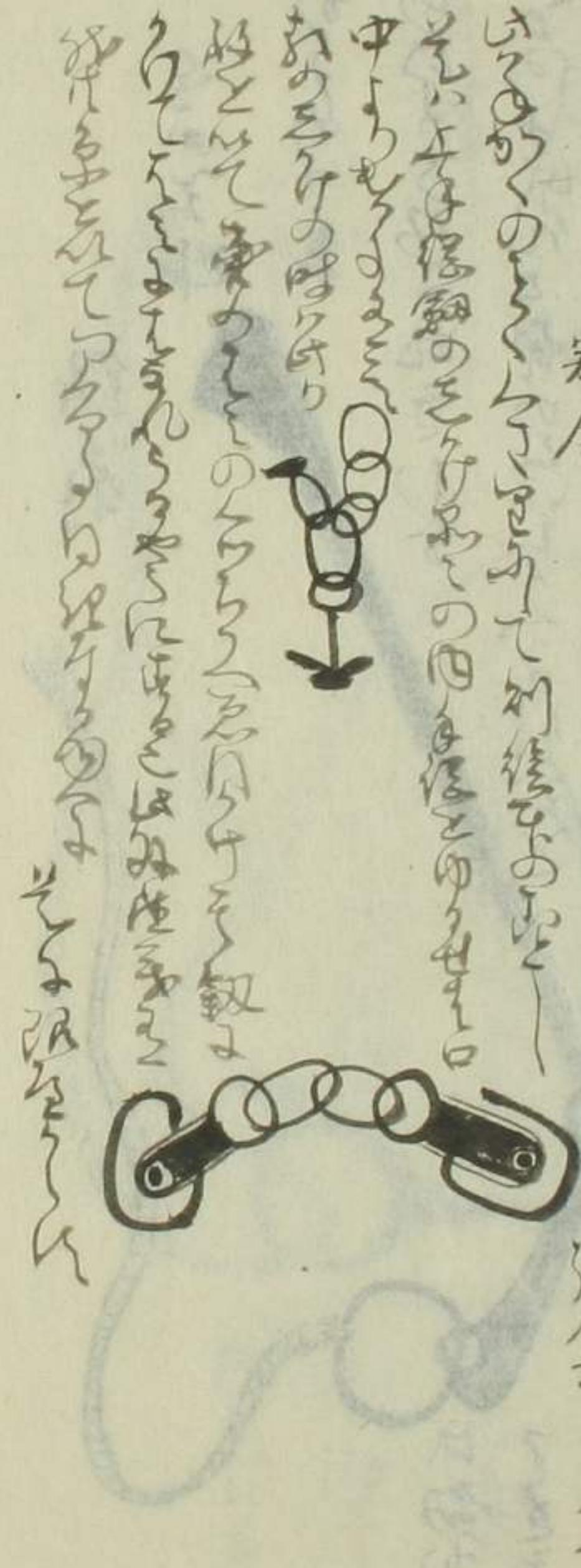
外側角と

火薬の事とて用ひ下はる  
くは連の事とて用ひ下はる  
かくらうひてば火薬乃  
なた乃脇すとシテ

とておはりあつてはひまくわらひをうかがふ  
てあまきとくに経過とくらしもとくに  
とあづかひあつてはりゆかよみかよみか  
きふすきあきのむ中のきかくよわくとくとく  
ゆくよきよきとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

卷八

卷之三



鉤要

たまひ朝ひる。

田子之子之谷

のりひへく用

中の鉤づかば

ヨウカナリケン

行のせん

七  
二  
三  
四

中華書局影印

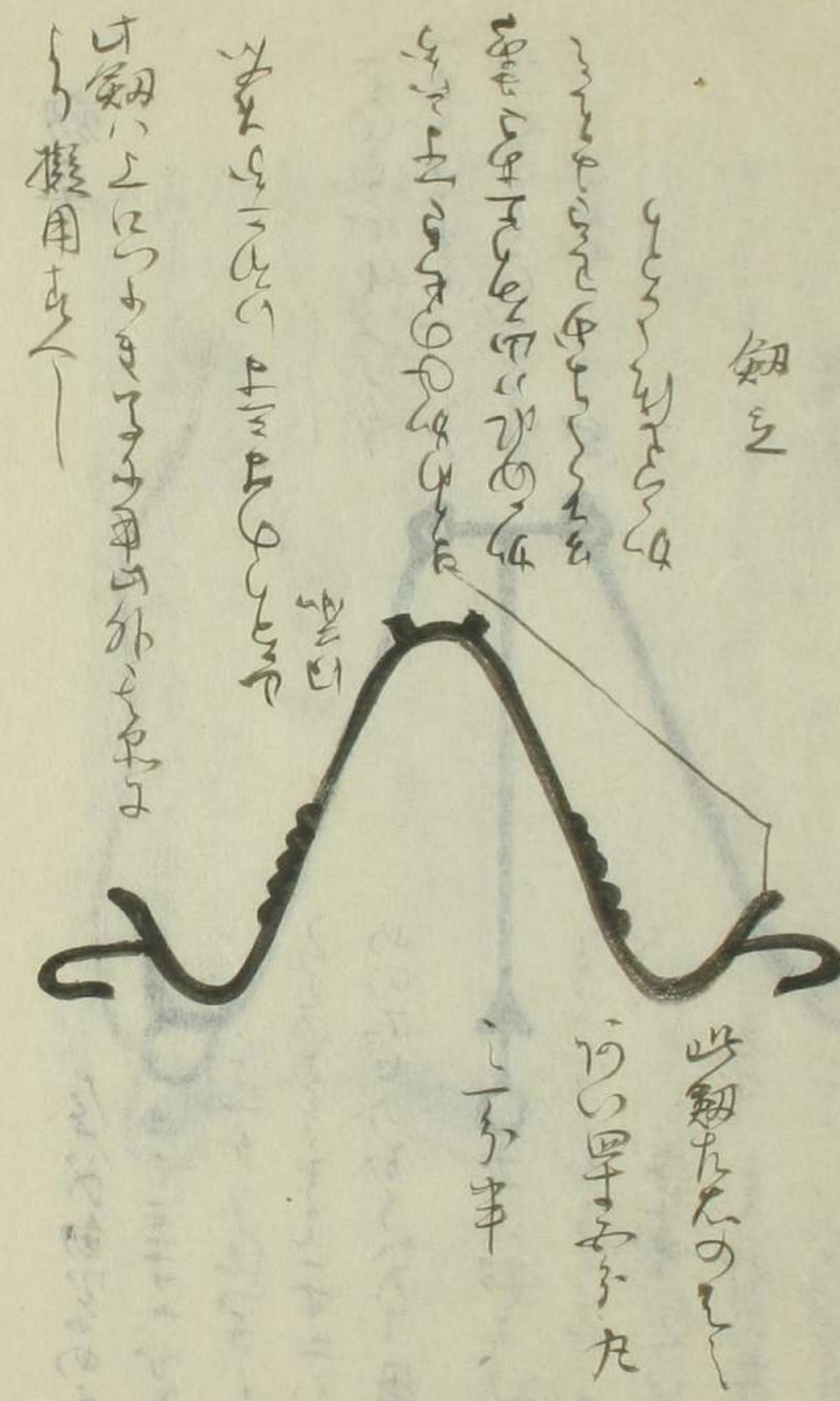
卷之二

うまとにほづくもじをもじるにまつてくわく  
しりうちんじゆの門をあらわすとまつてくわく  
そめくわくとまつてはまつて

劍立

些細なたのと  
らの單を丸

こす事



け劍は上にさき下に单外を立よ

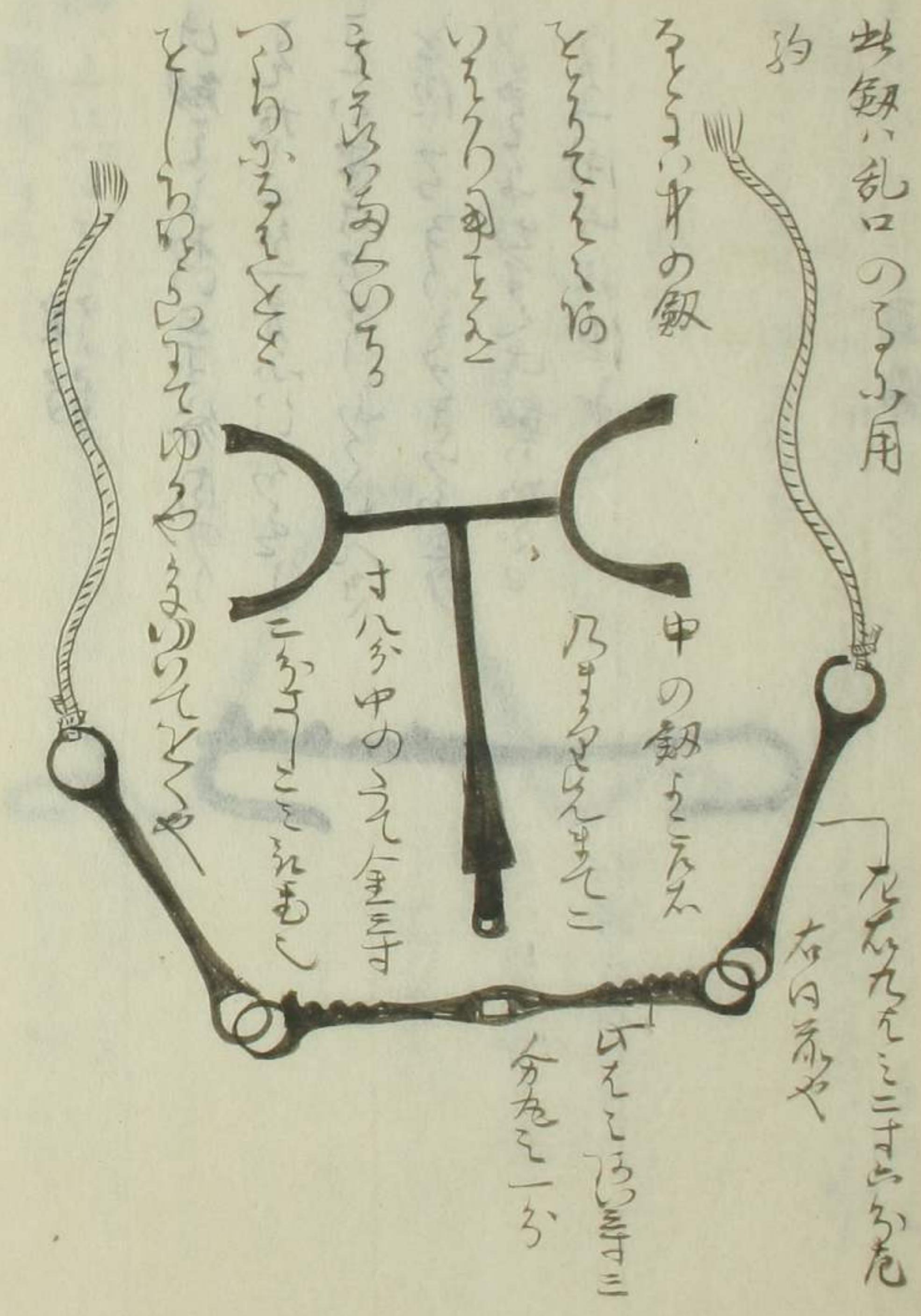
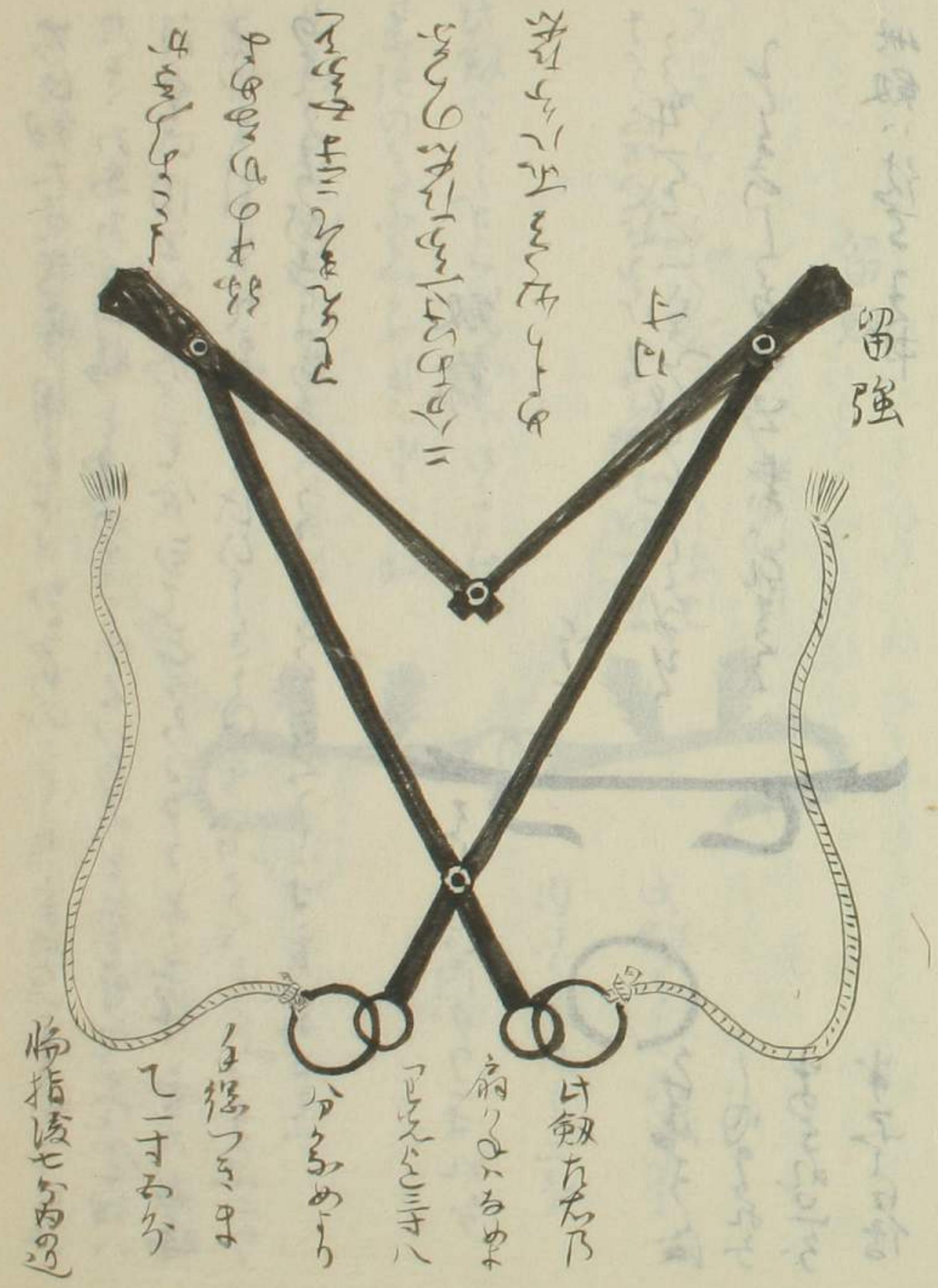
け擬用を

強弱

は劍をもわざ下分肉のり  
玉をたてて立ちふらわるる  
玉を立するうへるくひき  
と落とすうへるくひき  
シテ立すくは劍のひき  
立す用せ外酒を立

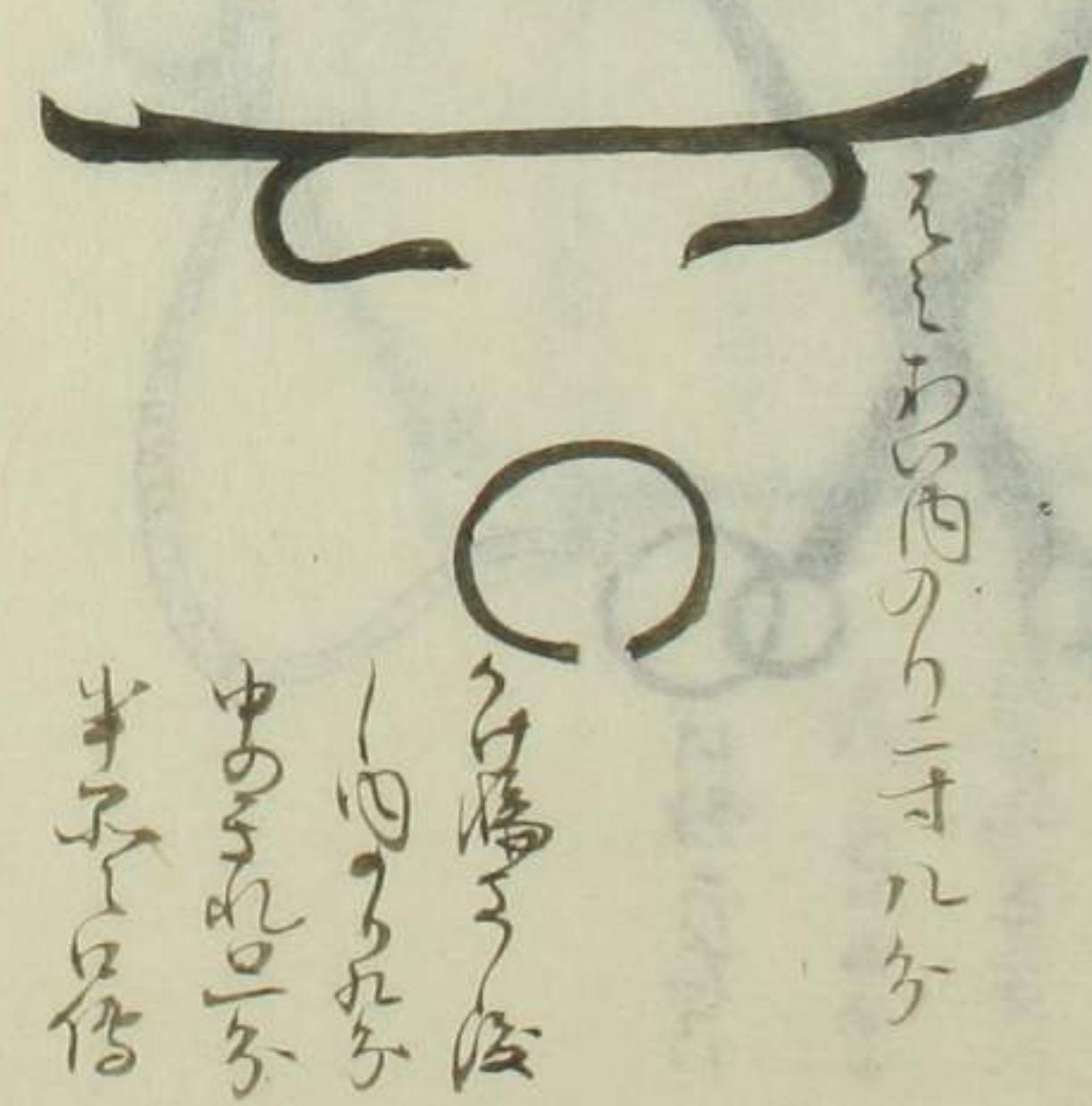


立劍



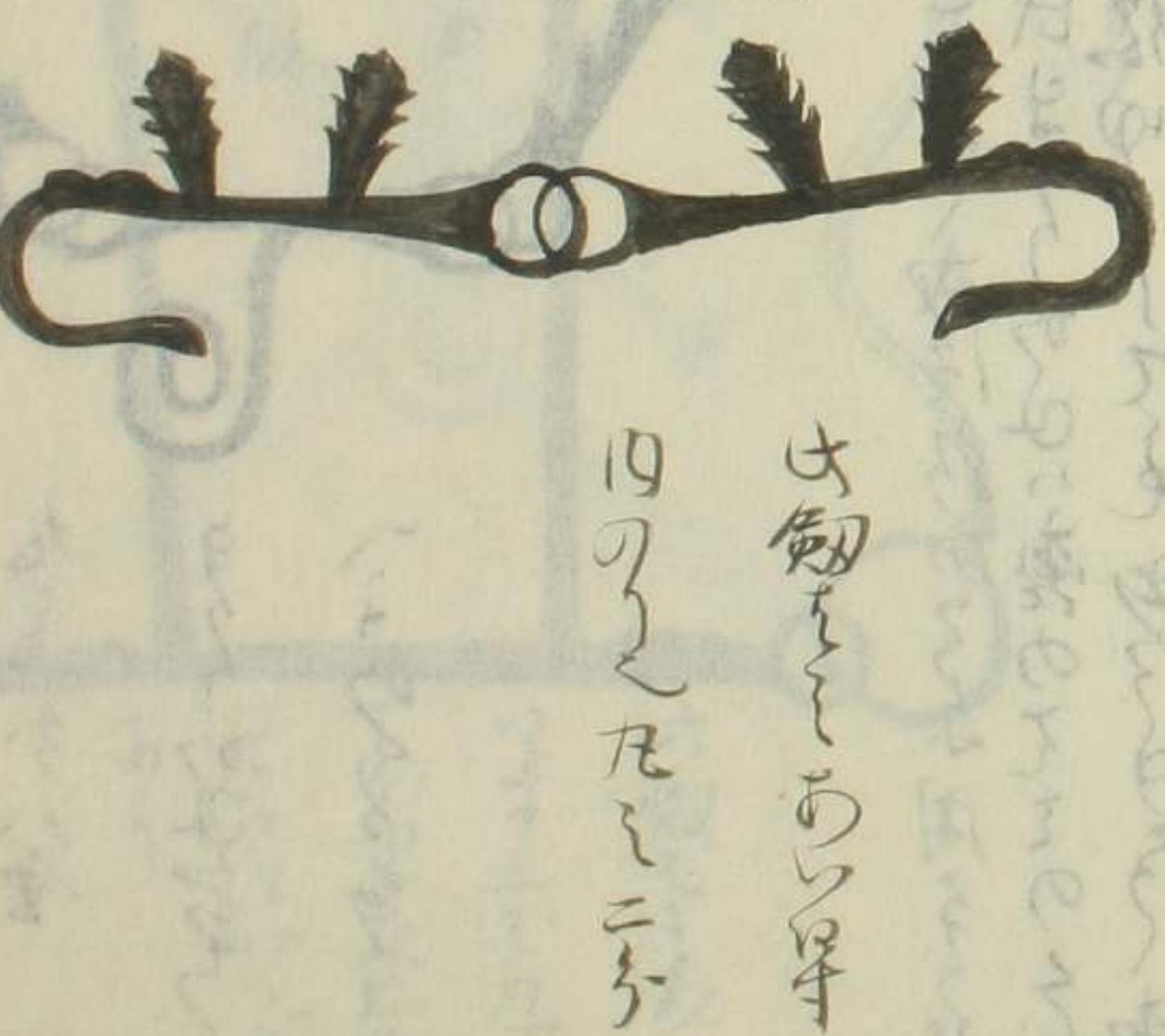
ちは効大遙より用もとのかみのうちの方のひもうりを  
れきあああく日暉と書のれこのじゆらうとよきせきて先を食ひ  
門をひ因とふとかつを合ひてもくつこうりとよはに書乃正暉  
のゆぢりとくとすま下はひくまのまつぶれとまぶ二分  
のまくらひやうわくまのまくらすまふすま

劍輪



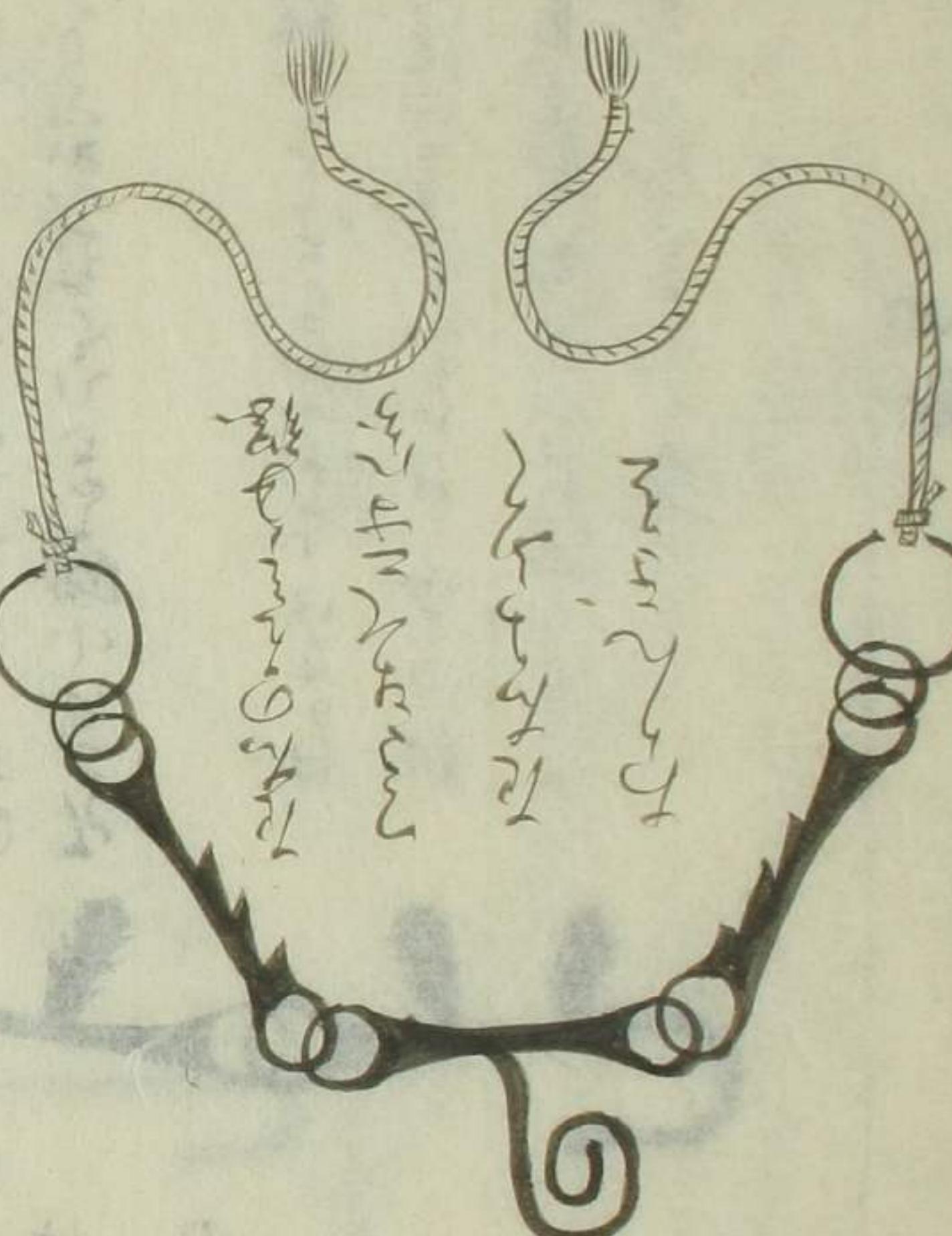
蒙古文書

朱敏一詩卷



は歎いとてもあらず  
星宿のまほろばのゆの  
まちあて生まつたものぞ  
かくんとく

曲  
劍

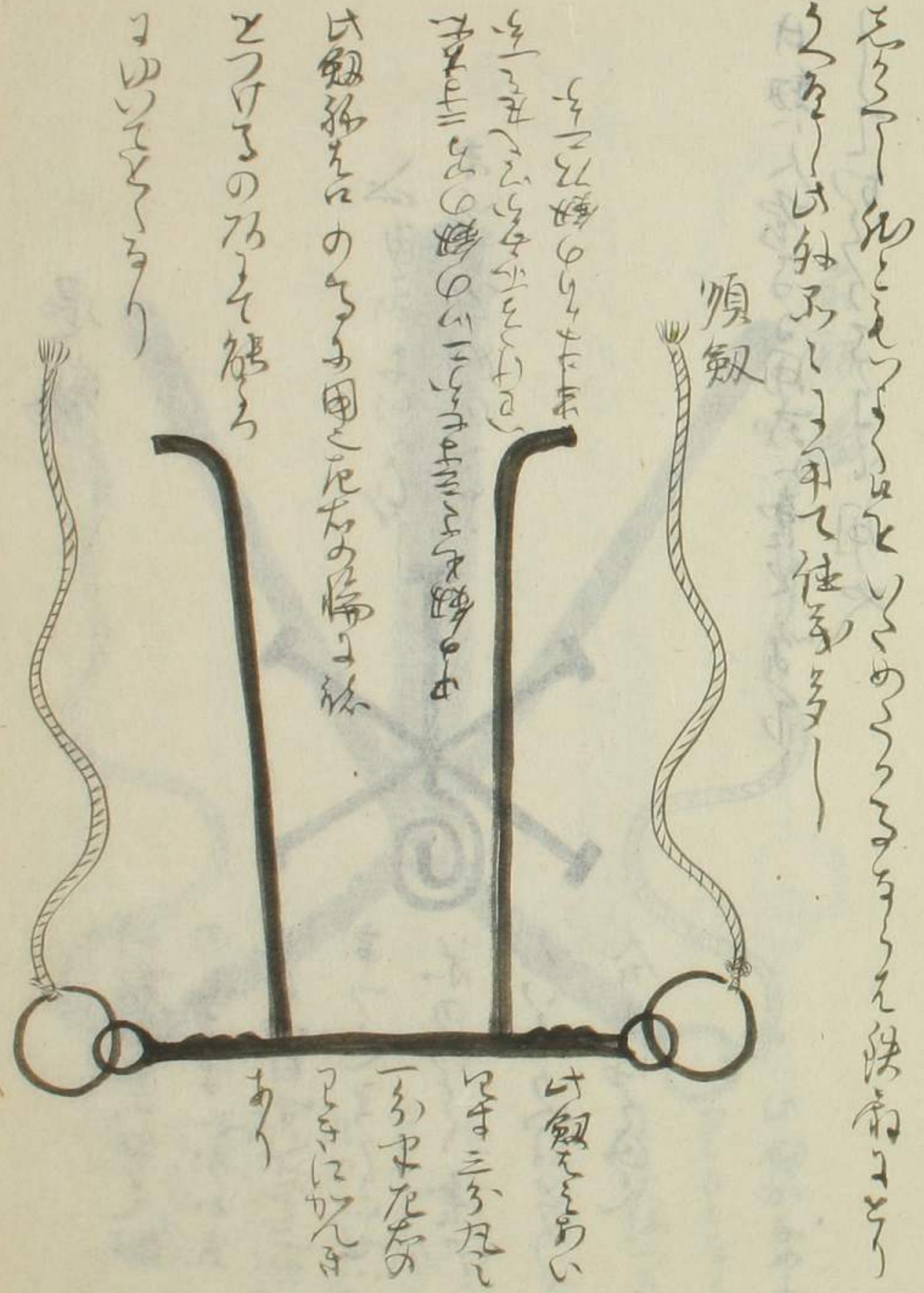


は効をもあひ尋  
丸三一分八厘

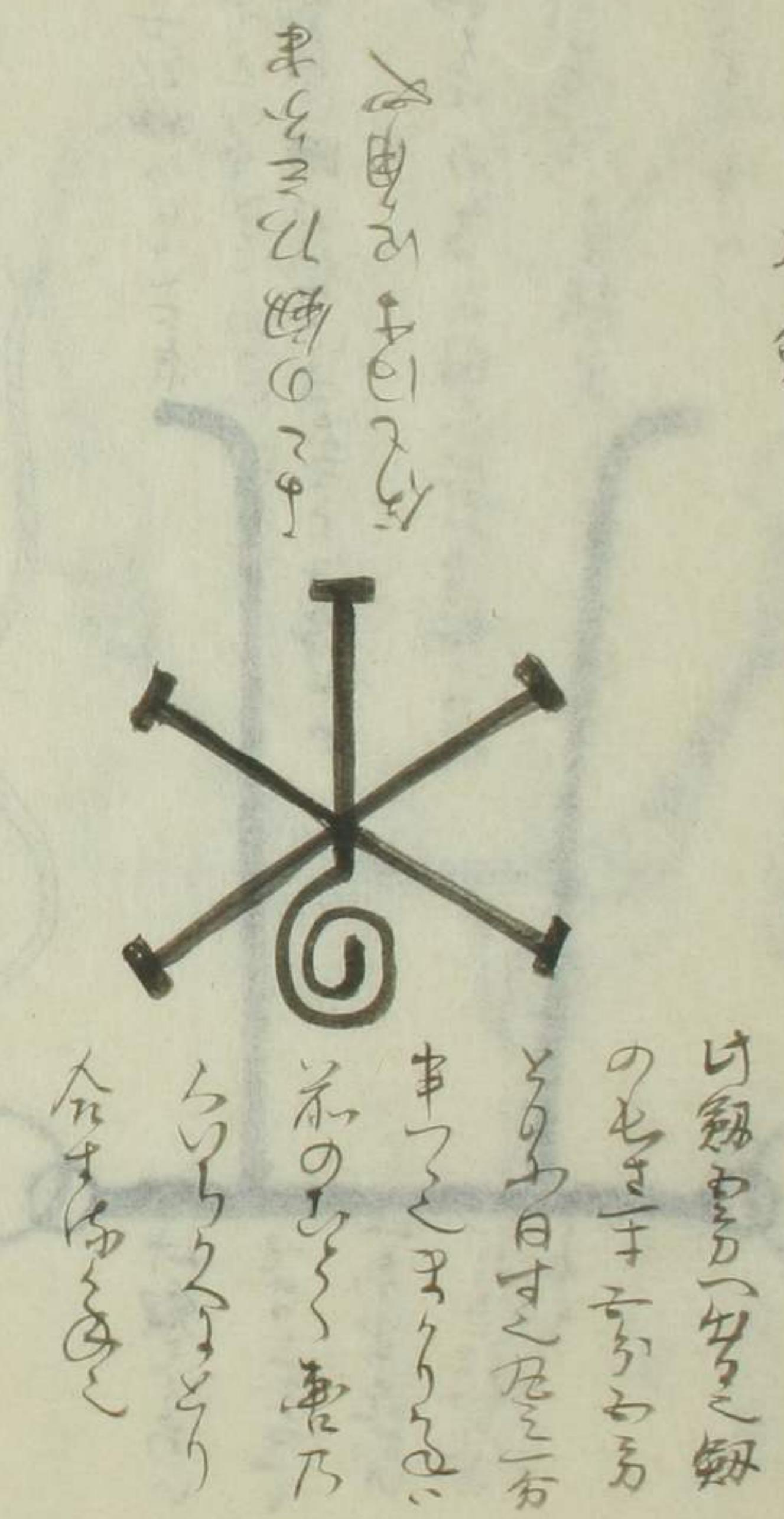
卷之二

蒙古文

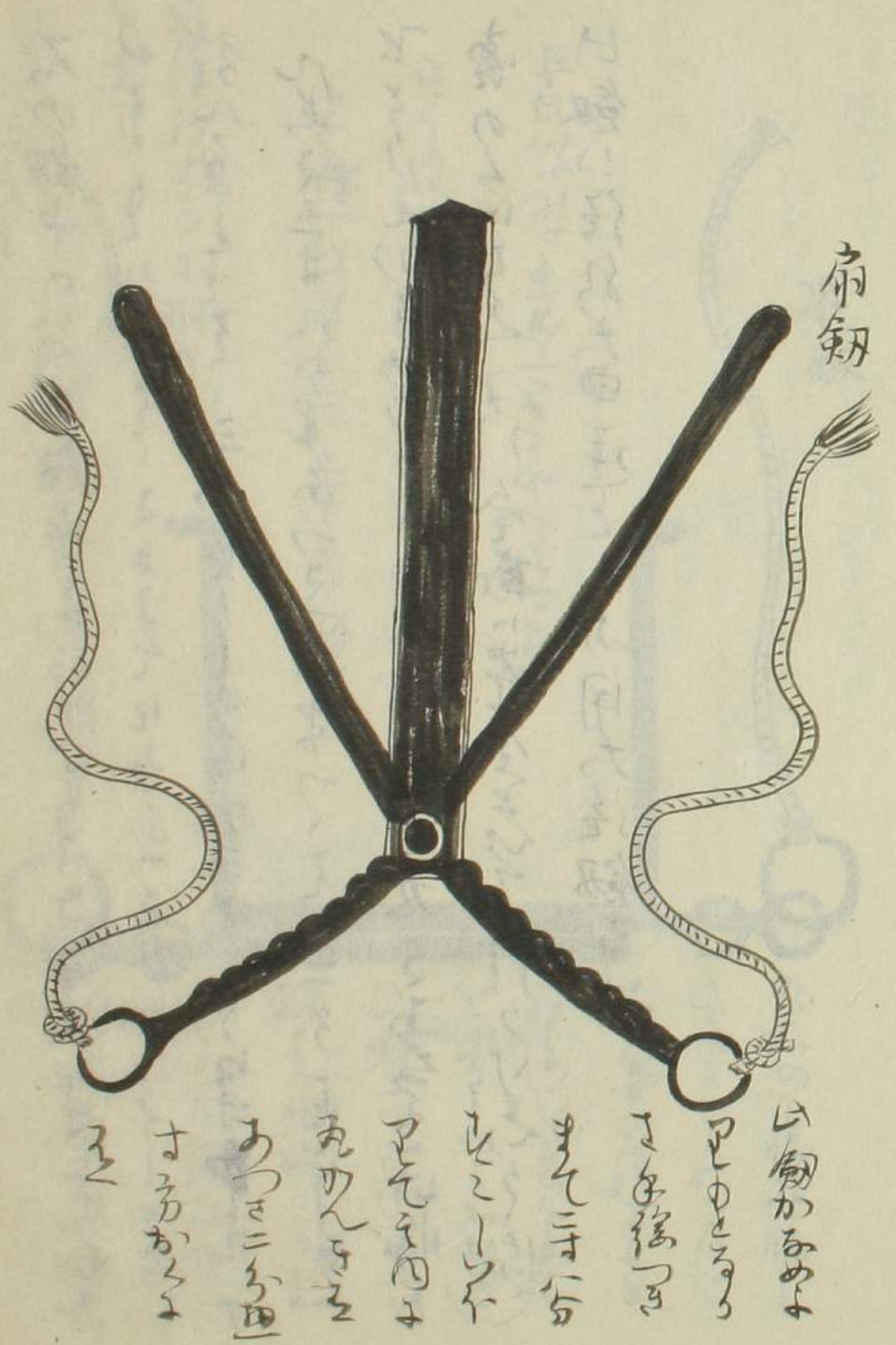
ち日歎に西朝後達の事々御使の事より用をもよ  
うるよあらへてとてかまひはまうかすへ度のとものうち  
うまむれりてとうらうやとなゆつてもうくまくま  
とお間あまはあまめりひそひそたうちへゆふ



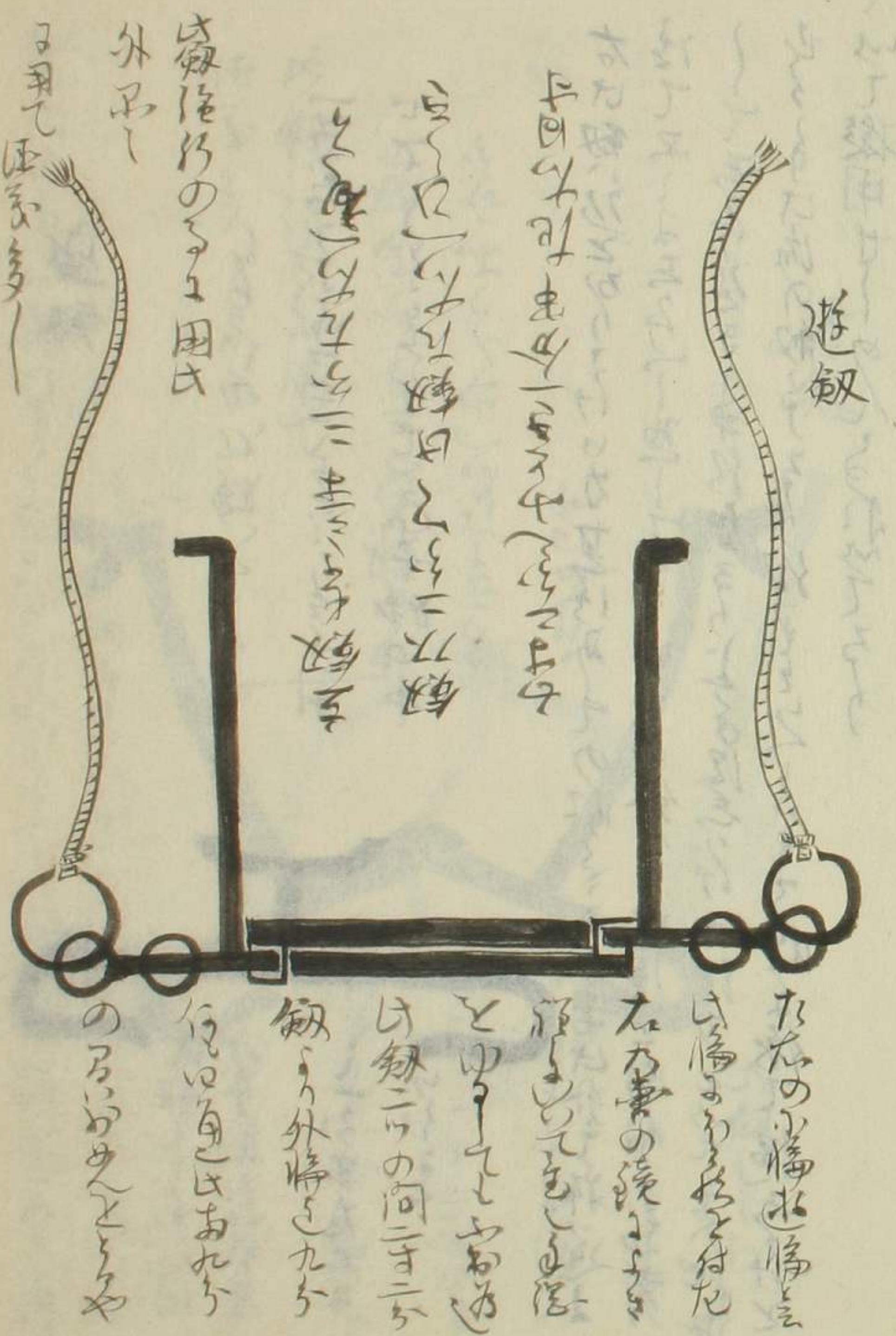
退歎



人衣する用或い事と云ひて  
してからうそすと用又



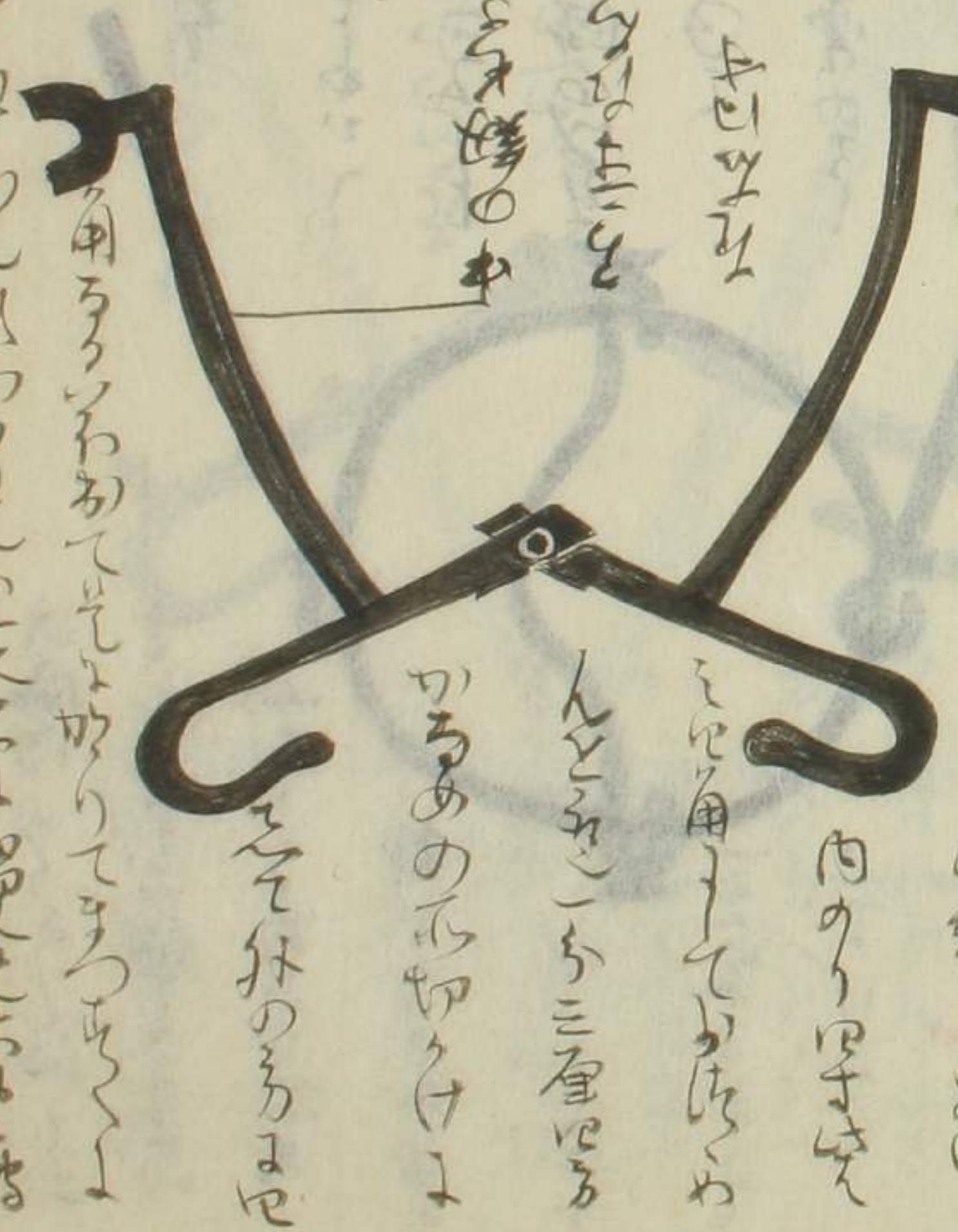
石の鍔中の箭の鍔をかまひて打てば手二三歩  
めぐらかにうちて弓を引ては手あつてもかくへ一筋ニ  
かへ重しおも、三歩五歩の内かまめむと早ゆひけ  
ルと云ふるがよあつてかやつても、ニシテ正しくて  
てうてのきのうのひまくわぬをあまきに候と  
書のうづくまに全體に曳き全體てりうけあくは  
い鍔の仕事も曲達とて用ひ法鍔なり



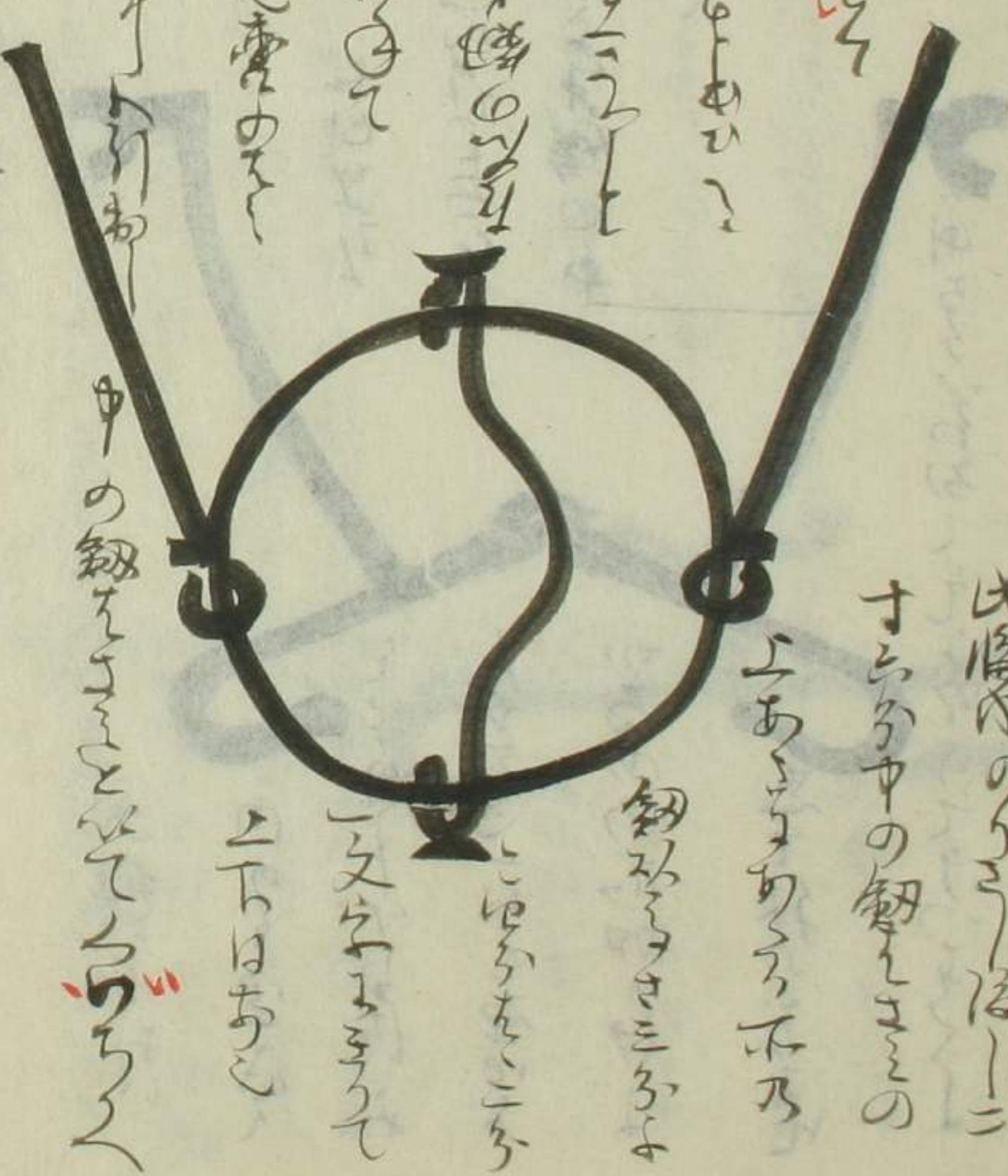
盛  
鉢

中華書局影印  
新編卷之三

は鉛をもじに  
の手をか凡



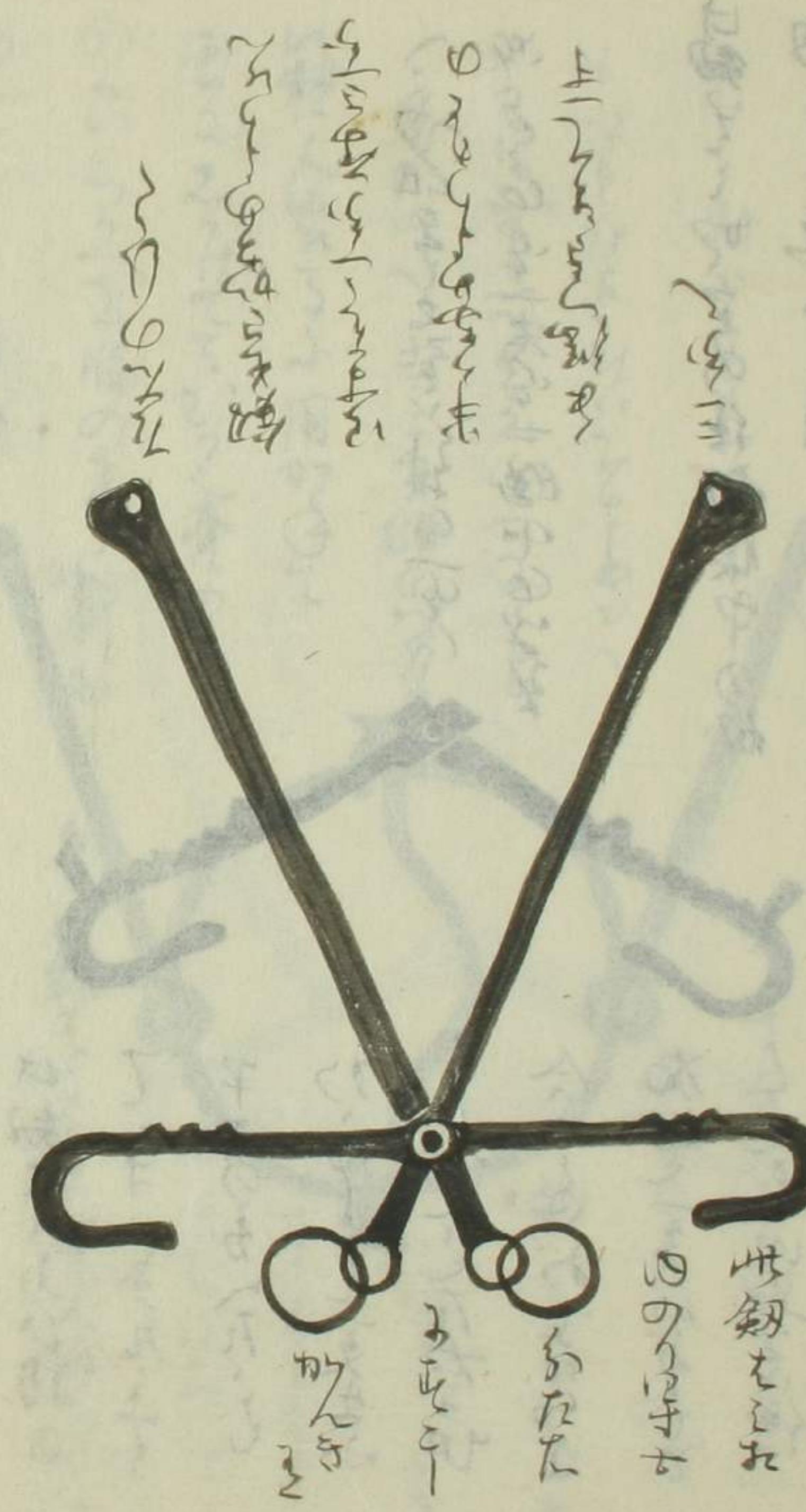
卷之三



The image shows a detailed black ink drawing of a traditional Japanese sword hilt (tsuba) with a circular guard (fuchi). The hilt is suspended by two cords (sageo) from a horizontal bar. The background features vertical columns of Japanese calligraphy in red and black ink.

隨  
叙

扇強



は鉗人達のるよ用

右上手得の擬鉗、萬葉根源久奥義代、銀鈴家傳  
之鉗也。至不得ものハ五て之鉗事之達矣。  
とひて又火鉗仰せし。シテのう追ふ萬葉之卷を  
分明也。

酒蒸曲隨之事私に於弱強肝曲すよもい酒蒸  
る。子供の明さく取に肝湯のるい氣力と馬一  
尾肝りからりてこうすり曲馬へそ達んとくも之  
才もかどるの酒蒸多内の効用としこうす  
達能す。他と圓卓とてモセヒラサウ解能

のゆくよ達の能力もあわてひきくして之え  
而後どうかまくすこし筋と筋と勘へ冷水と身をうけ  
弱れ馬の精氣とモチモチしてはる別うる馬  
實のものほりめどやくらみる肝多心地  
俗くふくらむるもつねみる程よしと仕あら  
作ひう

春 燕 秋 马 脱集

右酒一合 右酒と筋と筋と筋とあらとあらとがて  
かあらのののき合て用

右酒 二合 右酒 日二合半 右一合半加  
同 三合 右酒加 日合半加と並ぶ三つから  
かき合て用 日二合半二つ加 日八合  
左二つ半加  
半加四つ加半加 三つから半加半  
右酒角もろ牛半合半合と又そのひ達正と  
勘者より一年と既てせまうのとひと立用  
門出をも

中華書局影印  
卷之三

中華書局影印  
卷之三

